70年
安保粉砕

安保フンサイへ・人間の渦巻を!!

週刊アンポ

ゼロ0号

70

きみの
意志
アタマ
手と足
そして
金を
!!

週刊アンポとは何か

週刊アンポはたんなる雑誌ではない。たんなる雑誌ならこの世の中にはいくらでもある。これは武器だ。戦争に反対し、日米の軍事体制を攻撃する紙のつぶて。

活字の弾丸。

あくまでも反権力の運動の武器。

世は大量消費の時代。だが、この雑誌は、どこまでも反消費の雑誌である。資本主義の消費の仕組みにしばられているために、他誌の書けない問題を、週刊アンポは、どしどしとりあげ、たたいてゆく。戦争にたいしては徹底的であるべきだ。

買うこと、読むことで、この雑誌の目的は終らない。週刊アンポの運動にかかわり、みずから運動をかたちづくることで、書き手、読みてという型にはまった分類をうちこわしてしまおう。

行動で安保をつぶす意志のあるすべての人にこの雑誌は開放されている。

安保、沖縄、権力の腐敗について新事実を知る者はすすんで週刊アンポ社に来たれ。この雑誌をたねにして討論をすすめよ。その成果、批判を知らせよ。

週刊アンポを使って運動の渦を全国につくってゆこう。

これは0号の見本だ。一〇〇円以上のカンパで三〇〇〇万円が必要だ。

九月から一週おきに発行される〝本番〟は、本文六四頁、グラビア八頁、定価一〇〇円。

経営の破産は覚悟するところ、運動の不完全燃焼のみをおそれる。

週刊アンポに何がでるか

この0号の編集会議に参加した無着成恭は、本番が出るまで見本は何度でも版をあらためて使うのだという小田実の説明をきいて、「0号一三版というのがあるんですな」といって大笑した。そんな調子だから、九月までにどんなことになるのかわからないが、いま固まりつつある企画、筆者は、次の通り。

〈連載予定〉権力とたたかうもののみの鋭敏な眼と耳によってとらえられる「ドキュメント・70」それは内閣調査室、各国大使館、CIAの内部から、警察、自衛隊、アメリカ軍基地、いや、佐藤栄作の頭の中までえぐり出そうという企画だ。松田道雄「いかに死ぬべきか」、山田宗睦「オレの敵はこいつだ」その他さまざまな書き物の執筆者は、たとえば、写真、漫画、レイアウト担当者をふくめて、いいだ・もも、竹内好、大江健三郎、鶴見俊輔、野坂昭如、原卓也、前田俊彦、高橋和巳、柴田翔、埴谷雄高、堀田善衛、野間宏、小松左京、開高健、真継伸彦、無着成恭、山本義隆、秋田明大、粟津潔、安藤紀男、横尾忠則、栗原達男、中平卓馬、福島菊次郎、そして今これを読むあなた。

〈コラムと運動案内〉「アンポ講座」、「沖縄特報」。反戦反権力運動のスケジュール「アンポ運動カレンダー」。全国反大学、自主講座の紹介「アンポ大学」。マスコミ、権力のウソを追求する、「それはウソだ」。また「デモで日本をまわろう」。

最後に特筆したいのは、ベトナム、韓国（大村収容所、出入国管理法案ふくむ）をはじめとして、アジア各地の情勢について、毎号詳細な報告が出る。

きみになにができるか

週刊アンポは運動の武器、なんどでもくりかえす。書く、読む、くばる、すべてが行動の流れになる。とにかく必要なのは「オカネ」。雑誌の資金が欲しい。一〇〇万円の人で三〇人、一〇万円の人で三〇〇人、一万円の人で三〇〇〇人、一〇〇〇円の人で……。

ベ平連運動の初期に小田実は、「何でもしてください」と叫んでいた。反戦広告も、ゼッケン運動も、こうした訴えに応えて生れた。日本中から地鳴りのように人民の雄叫びがとどろいてくるためには、何でもできることから行動するというスタイルはまだ有効だ。ゼッケンひとつつける行動がショックであるような村や町がまだ日本の大部分ではないのだろうか。

デモをする。これはキミにもボクにもできる。どんな町でも、いや村でも、三人いれば日本や、世界中に向って自分の意志をゆきわたらすことができる。組織がなければ何もできぬなどというのは迷信だ。「デモをやろう！」

自分の意見と経験を書き、壁にハリ出す。週刊アンポに送る。これはいますぐできる。週刊アンポはそのためにつくるのだ。

ハタをつくる。ハタをたててデモに参加する。すると、知らない人が集る。たくさんの人が何かやるべきだと思っているのだ。

つまり人は行動できる。そして何が生れるか？行動する前には何が生れるかわからない。ただ安保と沖縄とベトナムに向って一人の人間が行動すれば、かならず周囲が、自分が、変る。世界はそうして変るのだ。

週刊アンポ

姫路は自衛隊の町である。五月三日と四日、市制八〇周年祝賀行事に自衛隊が大パレードをやるという。憲法記念日に自衛隊の示威がある！それはまさに「憲法への挑戦」ではないか。

そこでパレードの隊列にむかってビラをまくことにした。

そのビラは、ザラ紙を十二等分し、抗議文やいや味を両面に印刷しそれを三〇束に分け、紙で帯封する。それに一・五センチほどすきまをあけ、セロテープをはる。そのすきまは、投げたとき破れやすくするためだ。それからその帯封に長さ一〇～二〇メートルの小包用ロープをつける。

使用時は、ヒモの一端をもち、ビラ束を目標物の頭上に強くなげつけ、のびきったところで、ヒモをグイと引くとパッと紙吹雪が散るという仕組みである。

いよいよ四日。本格的な機甲化部隊（砲車・特車）のパレードである。

当日はA・B・Cの三班に分けた。

A班は、パレードの三〇分前に、大横断幕（憲法記念日に挑戦する自衛隊パレードやめなさい！）をかついで、パレードコースを先行し、ビラをくばる。その陽動作戦で右翼や私服をひきつけるわけである。

B班は、デパートの屋上から約一万枚のビラまき。

C班は、パレード閲兵台附近で、見物人にまぎれながら、すきをみて隊列にビラを投げつけるというゲリラ作戦。

パレード通過一〇分前、閲兵台付近は私服をまじえた警官で一ぱいで、もういっせいにこちらを注目している。先に来ていたビラ運びから紙包みをうけとると、スワとばかりに私服が色めく。（コラあかん）。そこでおもむろに中をひらきヒモのついていないビラ束をとり出す。わざとみせびらかして、ポケットにつっこみビラを一枚ずつまわりに配る。（ビラで安心したらしい）。紙包みを道路わきにさりげなく放っておく。閲兵台の右一〇メートルへ移動すると、私服一〇人位にとりまかれた感じ。

秘指令

ビラ〝バクダン〟を投げよう！

行進がはじまった。人垣をわけ前に出るふりをすると、ぴったりうしろに私服がついてくる。

すかさずうしろへさがる。私服が前になる。瞬間私服の肩ごしに司令の乗った特車めがけて、ヒモのないビラを三発。胴体に全部命中！パッとビラが地面に散ってゆく。

「ああっ、何をする！」私服に両手をつかまれる。物凄い見幕、人だかり。

「まあ手を放しいな」

「なんかわるいことしましたか？」

「あんたらぼくばっかり気ィとられてたらアカンで…」

彼らは、あちこちをみまわし出す。そのすきに手をふりほどき、人ごみにとびこんで逃げ、紙包みをおいたところへ―。誰も追ってこない。ビラ束をとりだす。

「おちついておちついて」といいながらヒモをさばき、思いきって強くなげる。ビラ束は、特車上の指揮者の頭上で見事サクレツ。パアッと紙吹雪がふりかかる。ヒモを使ったほうが数段効果的である。見物人がどよめく。台上の司令があわてている。二発・三発・全部を投げおえた瞬間、一〇人ばかりの私服にとり押さえられる。「この野郎」などという。

「こんなところでゴチャゴチャいうてもしようがないさかい、むこうで話をしよう」

二〇メートルほど離れた公園のベンチにすわる。

「ところは、名前は…とした」

「ビラをまいたらいかんのか」

「なんでつかまえるねん」

「ビラをまいたらいかんのか」

「歓迎のビラでもつかまえるのか」

「何の罪や」

すると『軽犯罪法』やという。

「第何条や」というと答がない。

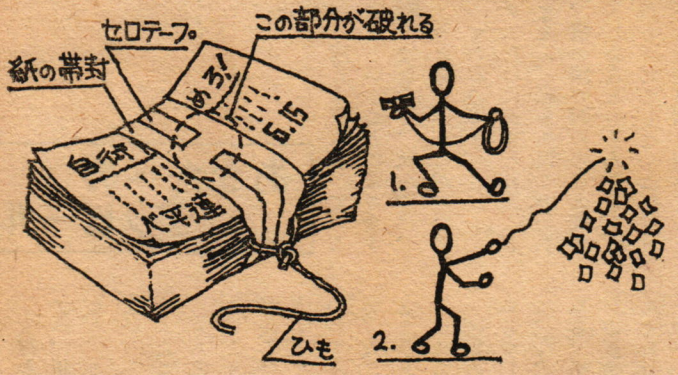
「もうええやろ。パレードも通過したし…」というわけで釈放。というのが一部始終。

さて、このようにしたヒモ付きビラ束を、大村収容所・米軍基地・野戦病院・自衛隊など高い堀や障害物ごしに、目標へとどけるという作戦はどうだろうか。

風の方向さえ見定めれば、こんどの経験からして、成功まちがいない。

この文章を読む人たちは、今すぐ、ビラをバクダンにして投げよう。ひとりひとり、また、集団で、安保に向って、安保体制にむかって、投げよう、今すぐ。

（向井孝・ベトナム反戦姫路行動）



アンポ・スローガン

安保をつぶせ
沖縄を私たちの手に
日本を私たちの手に

アンポは反安保の人間の叫び

アンポへ
人間の渦巻を……

あなたへのアッピール

安保――日米安全保障条約とはいったい何でしょうか。

紙に印刷された条文――それなら、お手もとの六法全書をひらかれるといい。この週刊アンポのグラビア頁にも全文がのっています。声を出して読む。五分とかかりますまい。簡単です。ただその五分のあいだに、次のようなさまざまなことが、あなたの胸に浮かび上って来ているかどうか。

たとえば、大学の構内にまっさかさまに墜ちるファントム戦闘機の姿。そのとき燃え上る炎。炎は東京は新宿という盛り場「民衆の街」のどまんなかでも燃え上りました。ベトナム行のジェット機用の燃料を積んだ国鉄のタンク車が炎上したのです。その「事故」のあとも、タンク車は、人々の反対の叫びをよそに、日に何度も「民衆の街」のどまんなかを通り過ぎて行きます。そんなことは、もうこの日本では日常茶飯事になっているのでしょうか。

ここからベトナムへ爆撃に出かけるなら、ベトナムのほうからもお返しに爆撃に来ることもできるはずです。こんな危険なことが行なわれていて、しかも、私たちはそれをとめることもできないでいる。

そうしたことのすべてのうしろに、安保条約――あなたが、今、五分間で読み上げた条文があるということ、あなたはそれをお知りでしょうか。

それでは、私たち日本人は、安保条約の下でアメリカの言いなりになっている被害者、ただそれだけのかわいそうな人間なのでしょうか。今でも、日本や沖縄からベトナムへむかって爆撃機が飛び立ち、軍艦が出航し、兵隊や弾薬を満載した輸送機や輸送船が出発していることはもう誰でもが知っている事実ですが、その事実を、ベトナム人の立場になって考えるとどういうことになるのか。日本人はかわいそうな被害者であるどころか、自分を殺し、傷つけに来るおそろしいアメリカとまったく同じ位置に立っている人間――共犯者だということになります。つまり、被害者ではなくて、私たちは、みんな、アメリカと同じように、加害者になってしまっているのです。

これはベトナムだけにかぎられたことがらではありません。私たちはこの条約があるかぎり、他の国の罪のない人間を押さえつけ、苦しめるという人間らしくない役割を背負わされてしまっています。そして、そうした役割を背負うことで、私たちは、自分自身をも非人間的にとりあつかっているのではないでしょうか。安保条約は、いつのまにか、私たちの心のなかにどっしりと腰を落ちつけてしまっているのです。したがって、安保条約をなくそう、それをつぶそうとする運動は、たんに政治だけの問題ではありません。もっと大きいひろがりをもった運動で、一口に言うなら、人間をとりだす運動だと言えるでしょう。安保条約は政治的によくないばかりでなく、私たち〝人間〟に対する侮辱なのです。

では、どんふうにしてつぶすのか。

安保条約とは何ですか。それは条文ですか。紙に印刷されたものにすぎないのなら、ことは簡単です。破ってしまえばよい。しかし、それで、安保条約はなくなったことになりますか。

もちろん、なくなりはしない。そんなことより、安保条約をつぶすためには、私たちひとりひとりの実際の行動が必要です。それしかありません。このことについては神だのみも人だのみもできない。たよることのできるのは、私たちひとりひとりが起ち上り、それぞれにかたちづくる運動だけなのです。

運動のかたちには、さまざまなものがあるでしょう。大きな組織の運動もあれば、今、生まれたばかりの小さな運動もある。労働者の運動もあればサラリーマンの運動もあれば学生運動も教師の運動もあれば商店の店員の運動もあればオバチャンたちの運動もある。一口に言えばそれは安保条約をつぶし、沖縄を私たちの手にとり戻し、それによって、日本の独立をとり戻す、いや、ひょっとするともっともかんじんなことは、私たちが安保条約の下で失なってしまっていた人間をとり戻す、とり戻すだけではなく、運動のなかで新しい人間をつくり出すことではないでしょうか。そうした運動、そうした人間の動きをまとめあげて、私は「アンポ」という名前で叫びたいと思います。安保条約が「安保」なら、それをつぶそうとするのが「アンポ」です。週

刊アンポは、そんなふうな「アンポ」のひとりひとりの行動、あるいは、そのひとりひとりの行動が大きくかたちづくる運動が自由に使用する武器なのです。誰がどんなふうに使ってもかまわない。あなたがもし「アンポ」の一員なら。

アンポ・何をいまするのか

目的をはっきりさせましょう。週刊アンポは雑誌ではありません。ひとりひとりが行動に踏み切り、運動をかたちづくるための道具であり、武器です。さしあたっての目的は三つあります。

安保をつぶせ。

沖縄を私たちの手に。

日本を私たちの手に。

「私たち」というのは、ほかならぬこのアッピールを書く私のことであり、それを読むあなたのことです。「私たちの手に」のあとに「返せ」とつづけて下さってもよい。それであきたらぬ人は、「奪い返そう」と叫んでもらってもよい。いや、叫ぶことより、自分で動き出すことが、まず、かんじんです。

目的を達成するために、三つのことが必要だと考えます。

一つは、その私たちが日本中でさまざまな運動をかたちづくることです。これまでにあった運動に加わり、それを大きくひろげる。週刊アンポは、おたがいの運動のあいだの連絡機関となるでしょう。どの運動がどのように週刊アンポを「利用」してもいい。週刊アンポは「私たち」みんなの道具であり、武器です。

あるいは、週刊アンポを中心にして新しい運動をかたちづくることもできます。読者集会というかたちで日本の各地で集会とデモが起こり、最後にそれは巨大な集会、デモの渦巻となる。これは新しい「人民議会」をつくり出すことでもあります。夢想ではありません。このことは、週刊アンポがこの七月二〇日を皮切りに実際に行なおうとしていることです。（裏表紙を見て下さい）。

三つの必要なことの二つ目は、こうした渦巻のなかから、「ゼネスト」をつくり出すことです。かつて総評の幹部は、安保ではゼネストはできない、国民の支持がないから云々の発言をしたことがありました。週刊アンポはその支持をつくり出そうとします。いや労働者自身とともに、「圧力」をつくり出そうとします。「ゼネスト」への支持と圧力——週刊アンポの行動目標の一つはそれです。

三つ目には、週刊アンポは、日本中にまきおこるさまざまな運動の渦巻のなかで、各種の分裂を大事のまえの小事にしたいのです。週刊アンポは「中立」をふりかざしません。はじめから、三つの目的をはっきりさせている点で、かたよっています。（もちろん、安保をつぶさないでおけ、という政府側もかたよっています）。たたかう相手は日本の権力であり、アメリカのそれなのです。

お金がいります。アタマも手も足も強い意志も——週刊アンポを出し、運動をかちづくって行くために、すべてのものがいります。これは一種の賭けです。すべてをぶち込んで、すべてのことをやってみる——週刊アンポはその方針で動きます。隔週刊で半年、お金がつづくかぎり出します。スポンサーはなし。この文章を書く私、この文章を読むあなた以外には、なし。お金を出して下さい。（カンパの種類は—一口百万円の大口カンパ、一万円以上百万円までの中口カンパ、そして、小口カンパは百円以上いくらでもよい。目標は三千万円。アンポ社あて、同封のフリカエ用紙で送って下さい）。書いて下さい。週刊アンポづくりに参加して下さい。週刊アンポを売って下さい。そして、新しい読者とともに運動を自分の手でつくり出して下さい。お金をすべてつかい切ったとき、この週刊アンポは消え失せ、そのとき、日本中に大きな人間の渦巻がつくり出されているのです。

（小田　実）

緊急デモニュース

アスパック粉砕！大村収容所撤去！

▼ベ平連「ベトナムに平和を！市民連合」は、アスパック開催を数日後にひかえ、6月7日、〝アスパック粉砕〟デモを行なった。清水谷公園から、米国、国府、韓国の大使館をへて麻布材木町に至る長いコースに、参加者は、市民、大学ベ平連など三千余り、学校帰りの高校生も目立った。

昨年の経験で、かなりの弾圧が予想されたが、それは、はやくもアメリカ大使館前で現実となった。完全武装で待機中の機動隊はいきなり学生の隊列に乱入して、防禦を固めるスクラムからまず五名を奪い去った。

次は、デモが解散地に到着した時である。とつじょ現われたのは右翼の宣伝カー。中からは機動隊と見まごうばかりの乱闘服にヘルメットの二〇名ばかりコン棒を手に集会へなだれこんできた。そこで腕に覚え？の各大学のベ平連、市民を後方へ避難させると、なおも襲いかかる右翼に応戦、なんなく撃退したが、負傷者多数を出した。

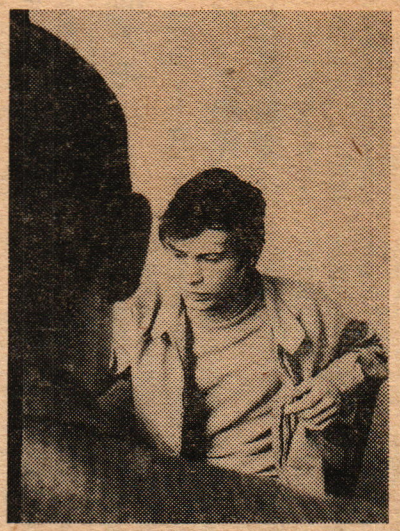
この間、警察は、右翼テロを放任したばかりか、到着した機動隊は、二名（一名未確認）の学生を逮捕したのである。

▼長崎県大村市にある大村収容所は日本の「強制収容所」として知られたところだ。韓国からの密入国者を収容して、五メートル余のぶあついコンクリートの壁のなかにとじこめる。三月三一日のベ平連デモを皮切りに大村収容所への、撤去を要求するデモは数回行なわれたが、六月八日にも学生、労働者、市民が連帯してデモをした。参加者は三〇〇名に対して機動隊員は六〇〇名。壁のまわりには鉄条網をはりめぐらして寄せつけない。数名の逮捕者を出したが、不当弾圧ぶりをまのあたりに見た大村市民の強い共感を得た。

週刊アンポ

脱走米兵デニスはどこへ消えたか？

MPの車は新明和工業のゲートに消えた。京都川端署前のすわりこみに流れる「ウイシャル　オーバーカム」の歌声、機動隊の壁の向う側を脱走兵D・デニスは連れ去られてゆく。安保体制下のミステリー……



「そうだ、ポールがやられたんだ。すぐ来てくれ」

「それで、いまは？」

「川端署。ベ平連のSさんが行っている。まだだれにも連絡がつかないんだ。すぐ集めてほしい」

ポールがやられた。ポールが逮捕された。

ポール、きみは誰だ？

ぼくか。ボクはダニエル・D・デニス。ニックネームは、ポール・E・サイモン。「サウンド・オブ・サイレンス」の歌手の名前をぬすんで来たんだ。あの歌が大好きだから。

脱走兵デニス

ダニエル・D・デニスが京都駅に降りたのは、一一月の肌寒い日だった。

ストーブで身体をあたためながら、かれはじぶんのことを話しはじめた。夜。金閣寺近くの宿は静かだった。

一九四九年一一月二六日アメリカ合衆国セントルイス生まれ、一九六六年一一月アメリカ合衆国陸軍に入隊。かれは志願兵だった。しかし、六八年四月からベトナム行きを命ぜられたとき、かれははじめての脱走をした。

それは、六〇日間で終った。捕えられたのだ。そしてベトナムへ。ベトナム戦争へ。

デニスは六八年一〇月に負傷した。立川基地へ送られ、すぐに座間キャンプの野戦病院へ移された。

厚いコンクリートの壁と、その上に張りめぐらされた有刺鉄線のなかで、この戦争のことを考えた。アメリカの狂った戦争のなかで、次から次へと消費されていく軍需物資。

この戦争のさなかにも、かならずついてまわる冷蔵庫。

デニスに忘れられない光景。小さな村を攻撃したとき、赤ん坊の女の子がとりのこされた泣き叫ぶ赤ん坊を裸にすると、ひとりの白人兵士は陽気な笑いをあげながらいたずらをする。小さな女の子はいっそう泣き叫ぶ。その白人兵士は、しだいに手をやきはじめる。まわりのアメリカ兵士たちは大きな声で笑う。そのときだった。白人兵士は赤ん坊を大きく振りまわすと近くの大きな太い樹にたたきつけた。赤ん坊は泣きやんだ。胸と顔がぐしゃぐしゃにつぶれて。赤ん坊に、死は、あっけなくやってきた。

白人兵士は、血だらけの赤ん坊をほうり出すと、陽気に笑いながらタバコに火をつけ歩き出した。デニスが二度目の脱走を決意したのは、このときだという。座間の野戦病院を抜け出したのは六八年一〇月二八日。

かれは脱走兵となった。かれはなにから脱走したのか。

一市民ポール悩みと生活

ひとはしばしば、脱走兵についてふたつのイメージをつくりあげる。

ひとつは卑劣な、憶病者のイメージ。そしてもうひとつは、英雄としてのイメージ。

だが、現実の脱走兵は、このふたつのイメージからへだたったところから出発する。

ふつうの人間、デニスは一一月二六日、二一才の誕生日をむかえた。JATEC（脱走兵援助技術委員会）のメンバーはケーキとウィスキーをかれにプレゼントした。その夜かれはビーター・ポール・マリーの『悲惨な戦争』ばかりを聴いていた。

「好きなのかい」

「…same as me（オレとおんなじだ）」

彼は、除々に日本のベトナム反戦運動に興味を持ち始めていた。細かいことを聞きだした。それだけでなく人間性の疎外についてどう思うとか、鈴木大拙の本を読みたい、などと言いだした。

しかし、それらはむずかしい質問だった。なにしろ英語で答えなくてはいけない。

彼は真剣だった。なにを悩んでいたのか。

一二月の半ばのこと。朝五時デニスは、となりに寝ていたJATECのメンバーを起した。

かれはその夜、一睡もせずになにかを考えていた。

「軍隊へ帰る」

デニスはそういった。

「どうして？」

スウェーデンへ行ったり、このまま日本にいたりするのはそれなりに意味があるだろう。だ

けど、ほんとうに大切なことはアメリカで、アメリカ軍隊のなかで戦争反対の行動をおこすことだ。

ポールはゆっくりと話した。いま軍隊へ帰れば、AWOL（無許可外出）で罰せられるだけだ。そんなのはたいしたことはない。そうじゃないかい？

しかし、実現の道はけわしいアメリカ軍のなかで、アメリカ社会のなかで、いま脱走中のかれが行動をおこすことは、かなりむつかしいことだ。

そして、ポールは結局JATECのなかに残り、脱走の旅をつづけることになった。

京都にいるあいだ、ポールはたくさんの友だちをもった。かれが脱走兵であることを知っている人も、知らない人もいた。

今年の二月初め、ポールは京都大学の近くに部屋を借りた。そのときからかれは本格的にポール・E・サイモンとなのるようになった。（かれが逮捕されたとき、かれの友人たちはしばらくはダニエル・D・デニスという本名を思い出せなかった。それほどかれはポールだった。一市民ポールとして生活した）

一市民ポール・E・サイモンは、英語の家庭教師をはじめた。だから、かれはあともう少しでじぶんの生活費をまかなえるようになったのだ。

そのお金のなかから、ポールが二カ月ほどまえから飼いはじめた小さな愛犬ダスティの小屋もつくりかけていた。

「かれは政治亡命を求めたのだ」

五月一二日。朝、かれは散歩に出かけた。ダスティに口笛で話しかけ、ポールは外へ出ていく。

その途中、彼は川端署の警察官に職務質問をされた。ポールがパスポートを持っていないことがわかると、そのまま川端署へ連行された。

しかし警察では、ポールが脱走兵であることがわからなかった。そして、身元不明のまま午後三時、出入国管理令違反と外国人登録法違反で逮捕された。

一方、ポールをかくまっていたJATECやべ平連などでは坪野法律事務所と連絡をとり、川端署へ小野弁護士が接見に行き、通訳としてべ平連の塩沢氏が同行した。

警察では、入管へ問いあわせをおこなっていた。

JATECとべ平連は、弁護士を通して、以後のポールの弁護士選任届を作製したあと、夜九時から会議を開いた。ここにはべ平連の鶴見俊輔・同志社大学教授も出席。

偶然性が強かったにしても、不良外人としてねらわれていたのではないか。ポールが脱走兵であることを警察ではわかっていないが、それが判明するのにそう時間はかからないだろう。記者会見は、米軍に引きわたされる段階でやってはどうか。

その夜、川端署の周囲には、中に八人の若者をのせた乗用車四台が、とまっていた。

川端署の灯は一晩中消えなかった。なかで、何かが静かに進行しつつあった。

その夜、別の場所では、今後の行動予定と記者会見用の資料作成があわただしくおこなわれていた。

夜は、車のなかの八人にも、行動予定を組むひとたちにも、そしておそらくは川端署のなかの市民ポール・E・サイモンにも不眠の夜として、明けた。

三回目の接見報告が入ったのは一三日の正午だった。取調べは、ほとんど進展していないことがわかった。

打って出るとしたら、いまのうちだ。重苦しい会議がつづけられた。打って出るとしたら、方法はひとつしかない。それは法廷闘争にもちこむことだ。

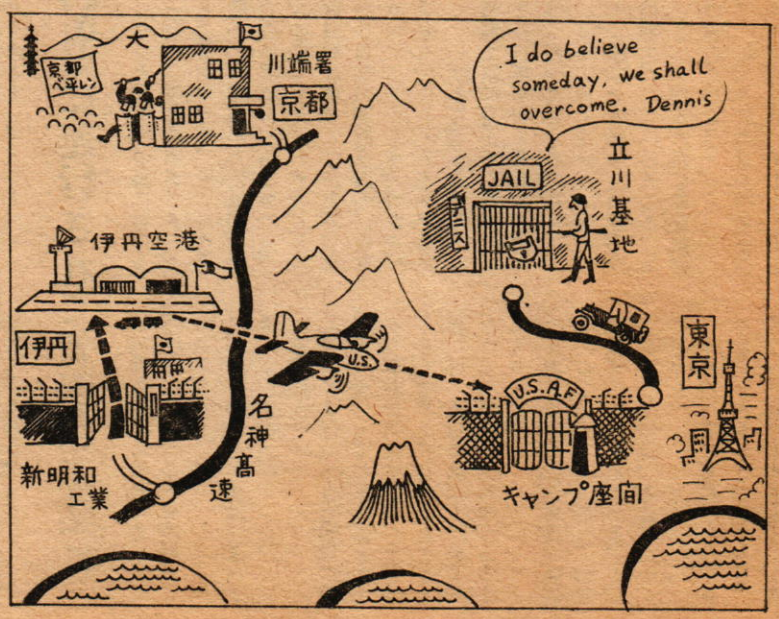
アメリカ軍人は安保条約により、出入国管理令にも、外国人登録法にもふれない。

だが……ポールの身分を明らかにすれば、こんどは刑事特別法で再逮捕されるだろう。決断はなかなかつかなかった。

午後四時、東京からべ平連の吉川勇一氏がかけつけた。打って出るか？

こちらから打って出なくてもポールの身元はまもなく判明するだろう。本人の了承を得て、打って出ることにしよう。

訴訟の準備。東京の芝法律事



務所とも連絡をとった。
午後一一時。三件の訴状ができた。
一　人身保護法による釈放要求
二　出管法違反容疑での逮捕の処分権不存在確認請求
三　予想される刑特法による引渡しの行政処分執行停止申立
午後一一時半、京都地裁民事一部（前田裁判長）へ提訴した。
同時に記者会見がおこなわれた。
現在進行しつつある事件に記者会見はわいた。
「ダニエル・D・デニス氏は日本への政治亡命を求めて、佐藤栄作首相に手紙をかいていました」

救援の市民・学生を襲った機動隊

その深夜、川端署のまわりには数十人のひとびとが集まってデモをし、『ウィ・シャル・オーバーカム』（勝利はわれらに）をうたった。弁護士の接見がくりかえされる。
一四日午後四時をちょっとすぎたとき、抗議行動と監視をつづけていたひとびとに機動隊がおそいかかった。あっというまに学生二名が逮捕された。
その直後、ボールは出入国管理令違反容疑のまま送検された。
MPが京都府警に現われたのは、それから四時間たってからだった。その情報に、川端署への抗議行動と監視のため、百名のひとびとが集まった。
地裁は、人身保護法による請求を却下してきた。理由は、身柄が警察署から地検に移った、というまったく形式的なものであった。
川端署にMPが現われたのは一五日の午後二時四五分だった。
二時四〇分に、川端署は出入国管理令違反容疑がはれたとして、いったん釈放した。そしてその同じ署長室で、川端署の一刑事により、刑事特別法で再逮捕。
そして、ボールはそのまま米軍MPに引きわたされた。
川端署のまわりに集まっていた百数十名は、川端署署長室のなかで巧妙に仕組まれた罠のなかにボールが落ちていくのを知ることはできなかった。
MPが川端署に入り、出てくるまでの不安な時間を、ひとびとはどうすごしていればよかったのか。
ほぼ一時間ののちに、ひとびとはMPと川端署員に囲まれるように出てきたボールを、ボール・E・サイモンをみた。
スクラム、プラカードが揺れる。座り込んだデモの上に、機動隊の警棒が乱れとんだ。
ガン、と鈍い音がして頭をやられた学生が、倒れた。
『ウィ・シャル・オーバーカム』だが、われわれはほんとうに勝利するのか？
みな歌った。警棒はようしゃなく乱れとぶ。だが、みんなうたった。女子学生の頬に、涙がひとすじ流れた。ひとりだけではなかった。たくさんの顔に、涙が流れていた。
「ボール！　ウィ・シャル・オーバーカム！　ボール！」

MPに連行されて新明和工業に

このころ、警察の裏にいたもう一台のベ平連の車がスタートした。警察の方は、表にだけ気を取られて、裏から走り出したこの車には気がつかなかった。
京都東インター・チェンジで米軍MPは車をとりかえた。それから名神高速道を西へ。かなりのスピードで走りつづける。
豊中インター・チェンジをすぎて、しばらく走ると、左手に新明和工業が見えてくる。車はおそらく新明和工業近くの伊丹空港へ入っていくのだろう。
この新明和工業伊丹工場はベトナム戦争で破損した米軍機の修理再生をしているところである。ここが関西における反戦運動の焦点のひとつとなったのは、昨年六月二六日の中核派のデモ以来である。そして、最近は運動の激化をおそれてか、軍需生産のとりやめをほのめかしていた。
MPらののった車は、そのとき、ふいに左へ曲がった。
「左折だ」
そのまま行ったら新明和工業へ入っていってしまうことになる。車が新明和工業の門に近づくと、そのトビラがするすると開いた。そして車は正門ゲートをくぐってなかへ入っていってしまった。
正面ゲートの内側には、先着したらしいパトカー数台と制私服警官がいならんでいる。トビラが閉じたのは、それからすぐであった。
ベ平連の車は工場のまわりをぐるぐるとまわる。もちろん、なかへ入れるわけもなく、伊丹短かい時間だった。ボールは米軍の車にほうり込まれた。パトカーと機動隊の車がその前後をはさんで走り出す。
ほとんど同時に、ベ平連が用意した車がスタートする。
そのとき、警察がその車のドアに飛びつく。急停車した車を機動隊がとり囲み、車ごと二人逮捕。警察は何の権利があって逮捕できるのか。

空港ビルへ車をまわして、送迎デッキへかけあがった。

夕方の暗くなりはじめた空の下、はるか左手の新明和工業の敷地には、MPの車と数台のパトカーがいならぶ。その少しはなれたところに米軍の小型機がプロペラの響きをあげていた。

やがて小型機はゆっくりと左から右へ移動して、滑走路のはしへ進んだ。

くもり空と滑走路のあいだを白と濃灰色にぬりわけた双発米軍小型機は、二、三度身ぶるいすると、フワッと舞いあがった。

東へ機首を向けて、見えなくなるまで、そう時間はかからなかった。

反戦運動としての法廷闘争

一五日昼。岡弁護士などが中心となってポールがどこに送られるかを追求していた。

夕刻。ポールを連行したMPが座間基地所属であることをつきとめた。

そして一六日午後三時。岡氏ら四名は座間を訪れ、在日米軍司令部法務部長スニーデン中佐に面会。そこでわかったことはポールは現在座間ではなく立川の重営倉にいることだった。

二〇日朝。そのときすでに決定していた主任弁護人ハンター少佐と共にポールに接見した。

かれは元気だった。

まもなく開かれようとしている軍事裁判（かれの容疑は不許可外出と脱走罪だ）には日本の警察から川端署の警官二名と、川端署での供述書が、入管から担当官一名が証人として出ることになっているという。

日本人がアメリカの軍事法廷にたつ義務はないこと、そのことをあきらかにしておこう。

日本の政府と、日本の警察と新明和工業を中心とする日本の軍需産業と、日本の裁判所は一体となってアメリカ軍に、アメリカ政府に協力していることはいまにはじまったことではないが、今度もまたポールの事件がそれをあきらかにした。

しかしながら、こうした権力の合同に対抗する動きが、市民のあいだに、人民の側にできつつあることも事実だ。

ポールにかんしていうなら、最初、軍裁はサンフランシスコでおこなわれるはずであったが反戦運動のもりあがりが激しいために、立川か座間になるという。

だが、そのことは日本で反戦運動に参加するひとびとへの挑戦だ。立川で、座間で、抗議行動をおこそう。鉄条網をこえてひとびとの声は法廷にまでとどくだろう。（べ平連はその行動予定を順次知らせていく予定である）

「最後の手紙」

ポール・E・サイモンは日本の市民への『最後の手紙』を書いた。

私はたぶん、合衆国へ送りかえされるだろうけれども、私は、私の信念と他のひとびとの権利のためにたたかいます。私は、日本のひとびととアメリカにいる私たちの信条を支持してくれるひとびととのあいだに結びつきをつくりあげたいと思います。なぜならわれわれは、数においては少ないが、われわれは世界でもっとも強いものです。勝利するには時間がかかるかもしれません。しかし最後には、われわれは勝つでしょう。私は、私と同じようなひとびとを支持していきます。そして私はよい世界のために、あなた方の仕事を続けていかれることを希望します。私の愛犬ダスティに関しては、マスコットとしてべ平連に差しあげます。それによって、私と私の信条を思い出してください

さて、いまMPが来ました。私は、すぐに連れ去られるでしょう。しかし、私はこの私じしんに対する軍事的侵略に抵抗を試みるつもりです。私は、さらに日本人民の手に沖縄がかえるようたたかいます。私は鶴見教授と常時、連絡をたもっていきます。これは当分のあいだ、私からあなた方への最後の言葉となるかもしれません。しかし、私はまたあなた方に連絡をします。

あなた方の、そしてわれわれの信条に幸いあれ。

日本のみなさまによろしく

mata aimasho

ポール・E・サイモンことDaniel D. Dennis

一九六九年五月一五日

午後二時二三分

（京都・川端署にて）

（好村慶志）

私たちも写真を撮ろう！

日本各地の機動隊員、私服刑事の氏名の顔写真を募集します。彼らが私たちの写真を撮るなら、私たちも彼らを撮ろう。編集部あてに送ってください。いずれ、機会をみて、日本各地の彼らの氏名つき写真を発表していくつもりです。

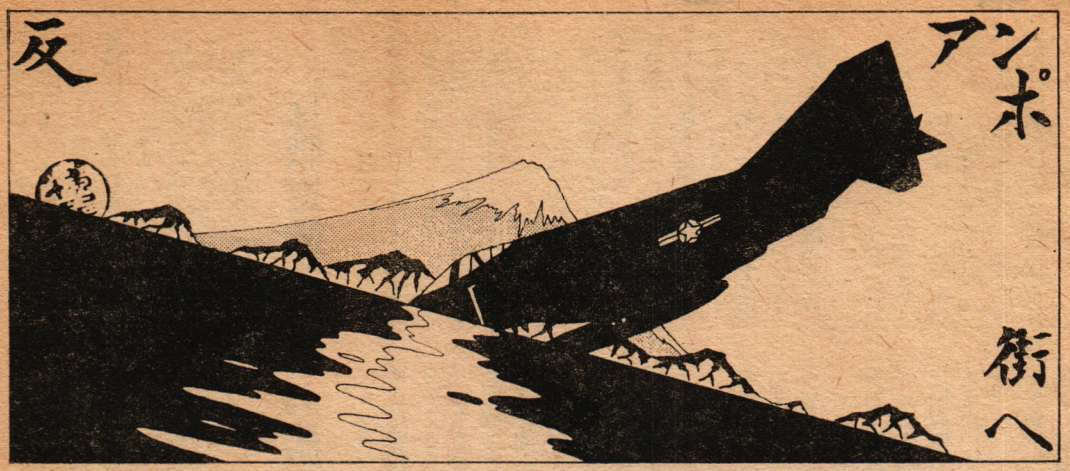
「外国人べ平連」が発足

外国人ばかりのべ平連が発足しました。およそ一カ月間、東京で発足の準備をすすめていましたが、六月六日午後四時、東京・渋谷の山手教会で開かれた記者会見の席で、正式に発足の発表をしました。

発起人は、イタリア人のステファノ・ベリエニさん（三四）、アメリカ人のドグラス・ルミスさん（三二）の二人です。

アメリカ、イタリア、フランス、中国、スウェーデンなどの各国人が、この外国人べ平連に参加しています。若干名の在日米軍人もこの運動に参加し、今後も、ひろく呼びかけて、運動をひろげてゆく方針です。現在のところ、この「外国人べ平連」には、三〇名ほどの外国人があつまり、六月十五日のデモに参加する計画です。

「外国人べ平連」は、①アメリカのベトナム軍事介入に反対②安保による、アメリカの極東政策に反対③日本政府が、在日外国人の政治行動を抑圧する恣意的な政治的逼向政策をとっていることに反対する。とくに「出入国管理令法案」に反対するという三つの目的にむかって行動します。「外国人べ平連」の連絡先は、東京のべ平連です。



岸信介は、十年前、「国民は私を支持している。その証拠に、野球場は満員ではないか」と言った。

岸信介に見えなかったのは、この日野球場にいて、次の日は国会前に坐り込むかもしれない人間たちだった。

六九年六月一日、早慶戦が終って、歌声渦まく新宿。**佐藤栄作**は、その中で耳をすましたか。

週刊アンポは街に出て、人と会いダイアルをまわす。

●**共産党**は、三回ほど相手がかわったところで「いや、週刊アンポというものの性格がわからないので、テスト版を見てからにしますよ」

●**社会党**。「うちでは反安保実行委員会というのがありまして、ここには**総評、中立労連、社青同**などが加わっています。六月二三日に明治公園で六時から集会を開きます。参加して下さい」

●民社党は、「六月二三日、六時から安保改定＝民主主義を守る会というのを日本青年館で結成します。これは最終的には県単位、市町村単位までひろげていくつもりです。」

●**公明党**。「安保条約の実質的形骸化を実施し、安保体制の段階的解消を計る。具体的には米軍基地の撤去、事前協議の厳格なる実施、防衛力増強義務の拒否などをすすめる。安保条約は、一九七〇年代を通じて、早期に主動的に解消する」

学生はどうか。

●**日大全共闘**。「六・一五集会に根こそぎ動員してとりくんで、いろんな団体との共闘を追究していきたい。運動の大衆性、戦闘性を発揮させたいと思う」

●**東大全共闘**。「あまり組織的議論はしてないんです。ただやはりいろんなセクトとの共闘を追求したい」

●**中核**。「あまり先のことは具体的にはきまっていないんです」というが、五月下旬から六月上旬にかけては、ぎっしりとスケジュールがきまっていた。早大闘争、愛知訪米、アスパック、出入国管理法。電話（九八四）八六五一

●**革マル**。「七月に全学連大会をやります。八月には国際反戦会議」

電話（三八一）五〇二一

●**社学同**。五～六月上旬の計画をこまかにいったあと「八月上旬に東京で国際反戦会議をやります」

電話（二六四）二九六一

●**フロント**は、「七月沖縄でB52撤去と労働布令に反対して集会とデモ。八月には安保とNATOに反対して原水禁運動とは別の国際反戦会議をやります」電話（二九四）五四五八

●ニューフェイスの**プロ学同**。「六・一五には参加します。六・二〇には大学立法粉砕全国ゼネスト統一行動があり、文部省＝国会デモを予定しています」電話（三四一）三二五三

●**反帝学評**。「当面は、アスパック、6・15にむけて闘争を組んでいく」

電話（三七二）四三三三

一方、市民の方は、ほとんどのグループが六月十五日一時三〇分から日比谷野外音楽堂で行なわれる**六・一五集会**には参加するという。

●**声なき声の会**「家庭の奥さんたちをひっぱっていくような行動をしていきます。機関誌の特集として〝安保と私〟というのを三号続けて出しています。

●去年六月に出発した**青年新劇人会議**「劇団壁をこえて、アマ・プロの区別をなくしながら文化的な運動を通して七〇年をとりくんでいきたい」

●**婦人民主クラブ**。「近いうちに大会があるんですよ。だからそれがすぎたらはっきりするんですがねえ」

●**市民ハガキ運動グループ**。反戦の世論をおこすために発足したグループだ。「ひとりの市民は自分の意志を述べる場所がないんで、その中継の仕事をやろうと思ってます」

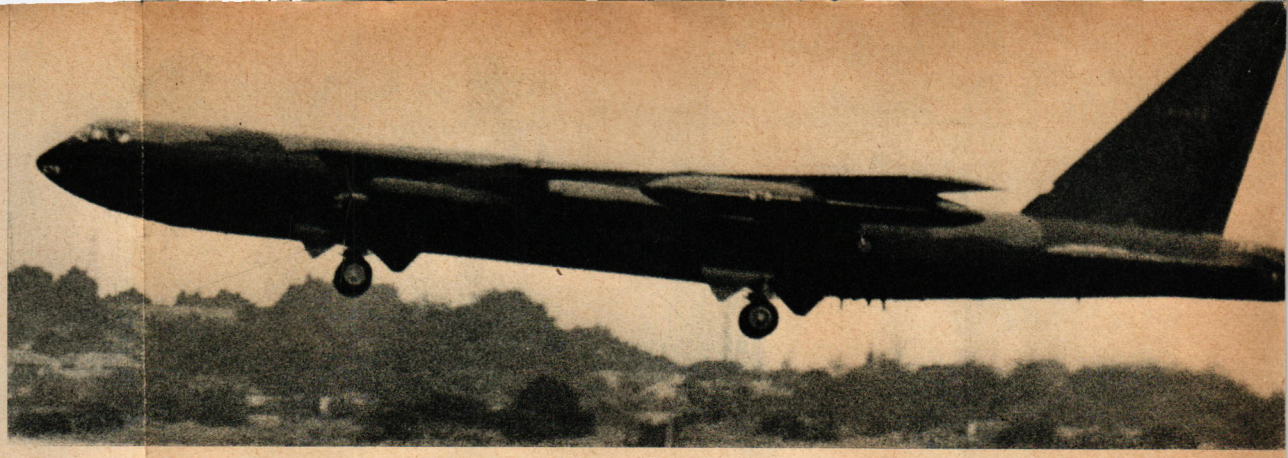
●**日本宗教者平和協議会**。「八月に沖縄戦没者の追悼をかねた沖縄返還要求大会をやります。十一月上旬に日本宗教者平和会議を関西でやります」

●さて**ベ平連**の方はどうか。南大阪ベ連や関西ベ平連が中心となって八月七日から一一日まで大阪城公園で〝反戦のための万博〟がひらかれる。権力者が強行しようとする〝万博〟に対抗して人民の側でひらくものだ。プレ反博講演会〝我々の芸術創造〟が七月二六日に中之島公会堂で夕方六時から。

なお全国各地の二〇〇以上のベ平連があるが、それぞれのグループの行動予定や主張などはベ平連ニュースに載っている。（東京・渋谷区神宮前三―三二―一八　外苑コーポ内）

電話　東京四〇二・五一六〇

（イラスト・横尾忠則）



日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約

（一九六〇・六・二三公布）

日本国及びアメリカ合衆国は、

両国の間に伝統的に存在する平和及び友好の関係を強化し、並びに民主主義の諸原則、個人の自由及び法の支配を擁護することを希望し、

また、両国の間の一層緊密な経済的協力を促進し、並びにそれぞれの国における経済的安定及び福祉の条件を助長することを希望し、

国際連合憲章の目的及び原則に対する信念並びにすべての国民及びすべての政府とともに平和のうちに生きようとする願望を再確認し、

両国が国際連合憲章に定める個別的又は集団的自衛の固有の権利を有していることを確認し、

両国が極東における国際の平和及び維持に共通の関心を有することを考慮し、

相互協力及び安全保障条約を締結することを決意し、

よって、次のとおり協定する。

第一条　締約国は、国際連合憲章に定めるところに従い、それぞれが関係することのある国際紛争を平和的手段によって国際の平和及び安全並びに正義を危うくしないように解決し、並びにそれぞれの国際関係において武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる国の領土保全又は政治的独立に対するものもまた、国際連合の目的と両立しない他のいかなる方法によるものも慎むことを約束する。

締約国は、他の平和愛好国と協同して、国際の平和及び安全を維持する国際連合の任務が一層効果的に遂行されるように国際連合を強化することに努力する。

第二条　締約国は、その自由な諸制度を強化することにより、これらの制度の基礎をなす原則の理解を促進することにより、並びに安定及び福祉の条件を助長することによって、平和的かつ友好的な国際関係の一層の発展に貢献する。

締約国は、その国際経済政策におけるくい違いを除くことに努め、また、両国の間の経済的協力を促進する。

第三条　締約国は、個別的に及び相互に協力して、継続的かつ効果的な自助及び相互援助により、武力攻撃に抵抗するそれぞれの能力を、憲法上の規定に従うことを条件として、維持し発展させる。

第四条　締約国は、この条約の実施に関して随時協議し、また、日本国の安全又は極東における国際の平和及び安全に対する脅威が生じたときはいつでも、いずれか一方の締約国の要請により協議する。

第五条　各締約国は、日本国の施政の下にある領域における、いずれか一方に対する武力攻撃が、自国の平和及び安全を危うくするものであることを認め、自国の憲法上の規定及び手続に従って共通の危険に対処するように行動することを宣言する。

前記の武力攻撃及びその結果として執ったすべての措置は、国際連合憲章第五十一条の規定に従って直ちに国際連合安全保障理事会に報告しなければならない。その措置は、安全保障理事会が国際の平和及び安全を回復し及び維持するために必要な措置を執ったときは、終止しなければならない。

第六条　日本国の安全に寄与し、並びに極東における国際の平和及び安全の維持に寄与するため、アメリカ合衆国は、その陸軍、空軍及び海軍が日本国において施設及び区域を使用することを許される。前記の施設及び区域の使用並びに日本国における合衆国軍隊の地位は、千九百五十二年二月二十八日に東京で署名された日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約第三条に基く行政協定（改正を含む）に代わる別個の協定及び合意される他の取極により規律される。

第七条　この条約は、国際連合憲章に基づく締約国の権利及び義務又は国際の平和及び安全を維持する国際連合の責任に対しては、どのような影響も及ぼすものではなく、また、及ぼすものと解釈してはならない。

第八条　この条約は、日本国及びアメリカ合衆国により各自の憲法上の手続に従って批准されなければならない。この条約は、両国が東京で批准書を交換した日に効力を生ずる。

第九条　千九百五十一年九月八日にサン・フランシスコ市で署名された日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約は、この条約の効力発生の時に効力を失う。

第一〇条　この条約は、日本区域における国際の平和及び安全の維持のため十分な定めをする国際連合の措置が効力を生じたと日本国政府及びアメリカ合衆国政府が認める時まで効力を有する。

もっとも、この条約が十年間効力を存続した後は、いずれの締約国も、他方の締約国に対しこの条約を終了させる意思を通告することができ、その場合には、この条約は、そのような通告が行なわれた後一年で終了する。

’60安保

’60

1・15 岸渡米、全学連羽田デモ
2・23 〝浩宮サマ〟お生まれ
3・28 三井三池で右翼の襲撃
4・19 韓国反政府デモ、李承晩ハワイ亡命
4・26 全学連、国会前で警官隊と衝突
5・5 ソ連U2型機撃墜
5・9 厚木のU2型機安保特別委で問題化
5・15 スプートニク打上げ成功
5・16 パリ東西首脳会談流れる
5・19 衆院、安保強行可決・20日0時6分
5・24 チリ地震津波三陸地方へ
6・3 全学連首相官邸突入
6・10 羽田・ハガチー事件
6・15 国会デモ南通用門突入、樺美智子さん虐殺さる！
6・17 社会党河上丈太郎刺さる
6・18 安保改定阻止国民会議30万人デモ
6・23 日米新安保条約発効
6・26 安保改定阻止全国統一行動
7・15 岸内閣総辞職
9・5 自民党、所得倍増政策発表
10・12 浅沼社会党委員長刺殺さる！
12・20 南ベトナム民族解放戦線結成

○ローマオリンピック
○〝僕は泣いちっち〟
○〝誰よりも君を愛す〟
○コトバ〝声なき声〟〝ZENGAKUREN〟

’61

1・3 米、キューバと断交
1・20 ケネディ、大統領就任
2・1 右翼少年、中央公論社嶋中社長宅を襲う
3・14 ライシャワー米大使任命
3・15 自衛隊の〝治安出動行動規準〟国会で追求
4・25 フランス、サハラ核実験成功
5・16 韓国、クーデター
6・21 池田、ケネディ会談
7・18 第2次防衛力整備計画決定
8・1 釜ケ崎騒動
9・15 第2室戸台風上陸

○谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」
○映画「用心棒」
○〝上を向いて歩こう〟
○〝スーダラ節〟
○〝有難や節〟
○コトバ〝レジャー〟〝プライバシー〟

’62

3・5 沖縄、〝メースB〟基地完成
5・3 常盤線三河島事故
5・13 米海兵隊、東富士から沖縄へ移動
6・27 横須賀、米第7艦隊、台湾海狭へ
8・14 堀江謙一、太平洋ヨット横断
9・4 防衛庁、〝ナイキアジャックス〟陸揚げ発表
10・22 米・海上封鎖〝キューバ危機〟
10・30 沖縄に水爆戦闘機3機配置

○北杜夫「楡家の人々」
○映画「キューポラのある町」
○「おそ松君」少年サンデーに登場
○〝アカシヤの雨が止むとき〟
○〝いつでも夢を〟
○〝王将〟
○コトバ〝バイそれまでよ〟

’63

1・26 米、原潜寄港申入れ
3・31 吉展ちゃん事件
5・12 F105D、沖縄から板付へ
7・1 自衛隊、バッジシステム採用決定
8・14 日本、部分核停条約調印
8・23 防衛庁、ミサイル〝ホーク〟千歳配置決定
11・2 南ベトナムクーデター、ゴ・ジンジエム殺さる。
11・9 東海道線鶴見事故
11・9 三井三池ガス爆発
11・22 ケネディ、テキサス州ダラスで暗殺

○吉行淳之介「砂の上の植物群」
○映画「にっぽん昆虫記」
○〝高校三年生〟
○コトバ〝バカンス〟〝ハッスル〟〝ガチョン〟

’64

1・27 仏、中国承認
3・24 ライシャワー刺さる
5・14 ミコヤン来日
6・16 新潟地震
8・2 トンキン湾事件
8・28 政府、原潜入港を受諾
10・1 新幹線営業開始
10・10 東京オリンピック
10・16 中国核実験に成功
10・16 フルシチョフ辞任
11・9 佐藤内閣発足
11・12 原潜シードラゴン、佐世保に入港
11・13 佐世保で原潜反対闘争
12・3 日韓会談再開

○柴田翔「されどわれらが日々」
○NHK「赤穂浪士」
○「ガロ」創刊
○〝愛と死をみつめて〟
○コトバ〝ウルトラC〟〝みゆき族〟

’65

1・11 伊豆大島大火
1・13 佐藤、ジョンソン共同声明
2・7 米、北爆開始
2・10 「三矢研究」国会で問題化
5・22 ベ平連第1回デモ
6・22 日韓条約調印、全学連など抗議集会
7・29 B52、沖縄からサイゴン南東爆撃

1・11 「期待される人間像」中間発表

沖縄立法院、超党派で抗議

○NHK「太閤記」
○「ベンチャーズ」来日
○〝まつの木小唄〟
○〝愛して〳〵愛しちゃったのよ〟
○コトバ〝根性〟〝シェーッ！〟

'66

1・17 B52スペインで墜落、水爆行方不明
2・4 全日空機墜落
3・5 BOAC機墜落
3・11 スカルノ失脚
6・14 アスパック、ソウルで開催
8・11 ベ平連日米市民会議
8・18 中国、文革勝利大集会
12・〝三派〟全学連結成
12・21 総評、ベトナム反戦スト
12・24 マニラ・ベトナム参戦国会議

○三浦綾子「氷点」
○「ビートルズ」来日
○〝君といつまでも〟
○コトバ〝まあ、いろいろあらあな〟
○〝期待される人間像〟

'67

3・29 恵庭事件、無罪判決
4・3 ベ平連、ワシントンポストへ反戦広告
4・15 〝美濃部サン〟都知事選当選
5・28 砂川総決起集会
6・5 中東戦争
6・30 佐藤訪韓
7・9 砂川大集会
8・8 新宿でタンク車炎上
9・7 米、エンプラ寄港申入れ
10・8 佐藤訪ベト、第1次羽田闘争、山崎博昭虐殺さる！
10・20 吉田茂死去
10・21 ワシントン反戦デモ、ペンタゴン包囲
11・11 由井忠之進氏焼身自殺！
11・12 佐藤渡米、第2次羽田闘争
11・13 ベ平連、米空母イントレピットの反戦脱走兵4人を発表
11・15 日米共同声明

○大江健三郎「万延元年のフットボール」
○〝世界は二人のために〟
○コトバ〝フーテン〟

'68

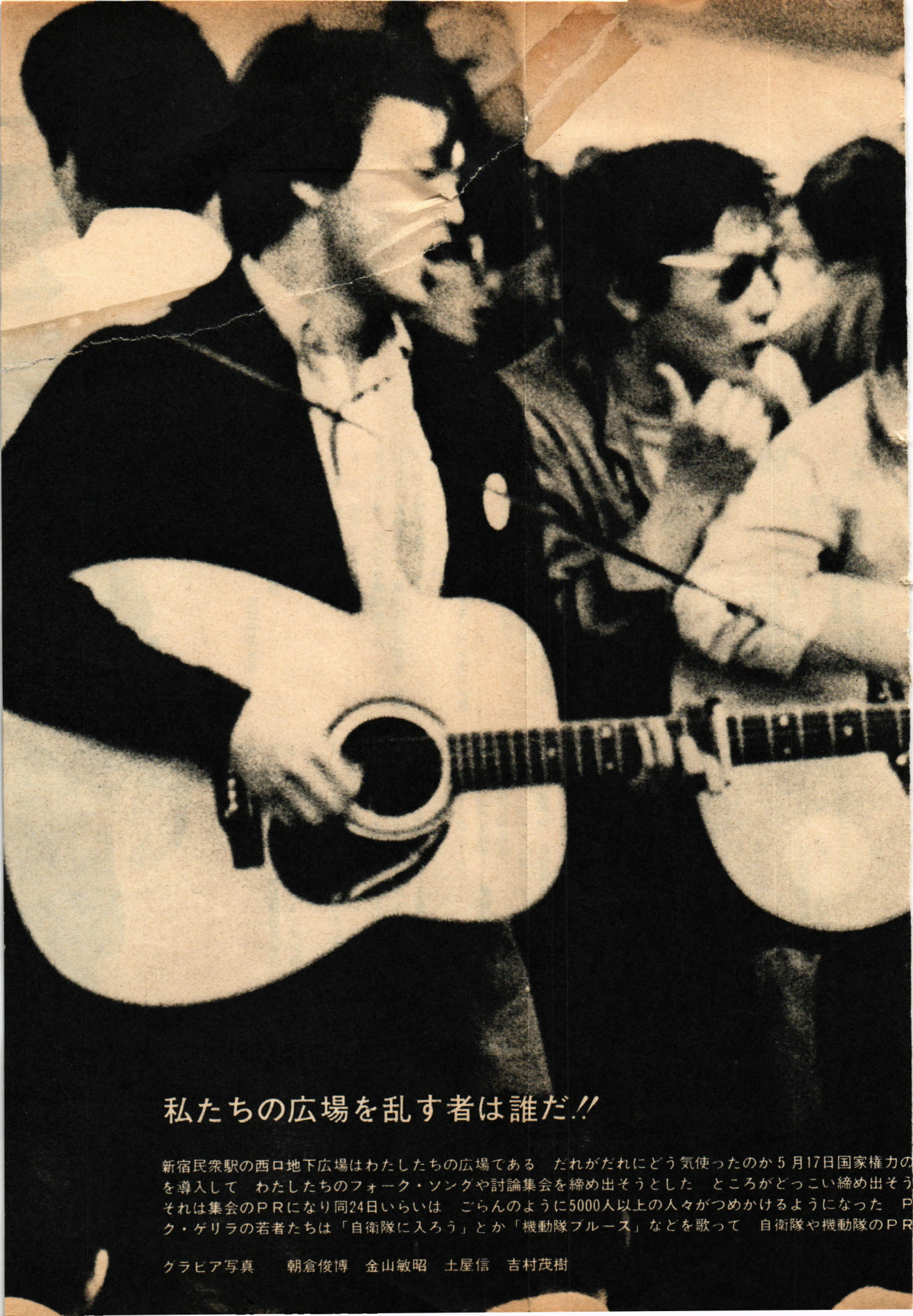
1・17～19 エンプラ佐世保入港、全学連佐世保闘争
1・23 プエブロ事件、エンプラ日本海へ
2・5 B52嘉手納駐留開始
2・26 三里塚闘争、学生部隊登場
3・8 王子闘争
3・10 三里塚闘争、市営球場大弾圧
3・31 北爆部分停止、ジョンソン不出馬声明
4・1 王子闘争、榎本重之さん虐殺さる！
5・18 パリ和平会談始まる
6・2 RF4Cファントム九大へ墜落
6・15 ベトナム反戦市民大デモ
8・11～13 京都、反戦と変革のための国際会議
8・20 ソ連、チェコ侵入
10・8 羽田闘争一周年
10・21 国際反戦デー、新宿米タン阻止闘争騒乱罪適用
11・10 沖縄主席公選、屋良朝苗氏当選
11・19 嘉手納、B52爆発
12・10 〝三億円〟犯人悠々逃走

○日大文闘委「叛逆のバリケード」
○映画「神々の深き欲望」
○〝恋の季節〟
○コトバ〝ハレハレ〟〝ノンセクト・ラジカル〟〝ゲバ〟

'69

1・18～19 安田講堂激戦
1・29 ニクソン大統領就任
2・4 沖縄ゼネスト不発
4・28 沖縄デー、銀座解放区出現
5・31 愛知訪米
6・8 アスパック開催、伊豆川奈ホテル
6・15 反戦反安保沖縄勝利6月行動10万人デモ
6・26 プレ〝反博〟大阪
8・7～11 大阪、反戦万博EXPO'69

'70 ★★★



私たちの広場を乱す者は誰だ!!

新宿民衆駅の西口地下広場はわたしたちの広場である　だれがだれにどう気使ったのか５月17日国家権力の
を導入して　わたしたちのフォーク・ソングや討論集会を締め出そうとした　ところがどっこい締め出そう
それは集会のＰＲになり同24日いらいは　ごらんのように5000人以上の人々がつめかけるようになった　Ｐ
ク・ゲリラの若者たちは「自衛隊に入ろう」とか「機動隊ブルース」などを歌って　自衛隊や機動隊のＰＲ

クラビア写真　　朝倉俊博　金山敏昭　土屋信　吉村茂樹

尖兵である機動隊
とすればするほど
Rのお礼にフォー
につとめている。

理論ではなくて思想を

板付の米軍基地の築城移転を阻止するというわれわれの地域闘争の経験からいうと、運動にははじめから思想だけがあって理論はなかったのである。思想があったとは、米軍基地がやってくれれば住民はこまることが目にみえているので、なにがなんでもよせつけないという思想があったということである。理論がなかったとは、たとえば安保条約があるかぎり米軍基地はさけられぬという理屈から、まず安保反対のたたかいがなければならぬというかんがえがなかったということである。

ベトナム戦争をみればわかるように、はじめは陥穴でしかたたかえなかったベトナム人民が、いきなり鎧袖一触のつもりで侵略を開始した空前の軍事力国家アメリカ帝国主義を、いまや無残ともいえる敗北においこみつつあるものはなんであるかといえば、それはいかなる原理によって侵略主義は否定されるかという理論ではなくて、なにびとといえども侵略者による支配には屈しないという、ベトナム人民の思想の統一にほかならなかったのである。もしもそこに理論があるとすれば、そのような統一された実践的思想が侵略主義にうちかった事実の叙述的説明にすぎない。

とはいっても、われわれは理論を必要としないというのではない。ただ、理論が思想をうむことはできなくて、思想が理論をうむとかんがえるだけである。具体的にいえば、米軍基地を、あくまでも阻止する思想から安保反対の理論がうまれ、安保反対の理論から基地反対の思想はうまれてこないのである。

たとえば三里塚空港反対闘争は、あらかじめ反戦の理論でかたまった学生たちによってたかめられたかのごとくみえる。しかし仔細にみるならば、いたずらに理論に固執する代々木系学生たちは次第に退却を余儀なくされ、なんとしても空港はよせつけないという思想に徹底した学生たちが、かえって農民の理論的水準を代々木系以上にしている。

さらに重要な点だから強調しておかねばならぬことは、戦線の統一を可能にするものは理論ではなくて思想だということである。現にわれわれの基地反対闘争で、自民党の選挙運動機関にもひとしい婦人会の幹部をも戦線にくりいれることができたのは、闘争が理論によらず思想によったためである。

このごろ私は、各派の急進的学生組織から機関紙その他多数の印刷物の恵贈をうけている。しかし正直なところ、理論的な論述から啓発されることはまれで、むしろ失望することのほうがおおい。が、それにもかかわらず私は、たとえば代々木あたりの連中からトロツキストとよばれておそれられている彼らに、心からの共感をおぼえずにはいられない。なぜならば、私がうごかされるのは理論ではなくて、それをいう人間的な思想だからである。

前田俊彦

安保——この日本"租界"

安保は諸悪の根元だ。在日米軍は、暴力団さながら、わがもの顔にふるまっているのに、日本政府は、それを取り締ろうとしないばかりか逆に暴力団の保護に汲々たるありさまである。

まず、占領下、一方的に取りあげた土地や施設の多くを現在でもタダで使っている。地代も家賃もビタ一文払わずにである。そればかりか、基地拡張を要求し、土地取り上げにかかった費用は、全部日本国民に負担させたのである。

これはまったく無茶苦茶な話だが、日本政府はその無茶苦茶を合法的にできるよう、安保条約や地位協定、さらには多くの法律を作って保護している。まず米軍基地拡張のためには、地主や国民が反対しても、強制的に取り上げる「土地使用の特別措置法」がある。そのうえ、米軍に負担をかけないで施設、区域を提供するという協定を結んでいる。

そればかりか、その米軍基地には、地主であり家主である日本国民は立ち入れない。正当な理由なく立ち入れば一年以下の懲役で逮捕される。刑事特別法第一条は、そのことを定めている。したがって、日本人は犬以下である。

戦前の中国では、上海のイギリス租界の芝生に「犬と中国人の立入禁止」という立札があった。中国人は犬なみに扱われたわけである。

けれども、現在の日本人は犬以下である。というのは、米軍基地に入った犬はけとばされることがあるかもしれないが、逃げてしまえば米軍も日本の警察も深追いはしない。けれども、日本人が立ち入れば、刑事特別法違反で、どこまでも追求する。

事実、米軍の立川基地拡張が問題になったとき、基地内にある民有地を、もうこれ以上貸すわけにはいかないし、返してくれといって基地に立ち入ったところ、日本の警察と検察庁は、その人たちを逮捕して裁判所に起訴をした。東京地裁では、安保条約と駐留米軍は、憲法違反だとして無罪にしたが、最高裁判所は、その判決を誤りとして、裁判をさし戻し、有罪にした。その警察と裁判所の費用は、みな、日本国民が負担するのである。

それに対して、米軍は自由に立ち入りできる。兵隊だけでなく、爆撃機も、原子力潜水艦も、パスポートなしに出入りでき、出入を邪魔するものを排除できる。高い建物を破壊させたり、旗ざおを引きぬくこともできるのである。そればかりか、電波まで自由に出入りできるよう、テレビや蛍光灯まで禁止できるのである。そしてその米軍は、本土基地と沖縄基地を使って、朝鮮とベトナムを爆撃、攻撃し、それらの国土と産業を破壊し、人命を殺傷し、民族統一と独立闘争を抑圧する犯罪行為にあけくれている。そして、最近では金がかかりすぎたということで、日本に肩がわりさせようとやっきになり、日本政府も親分のいうことを聞いて、肩代りに汲々とする有様である。

諸悪の根元である暴力団をそのままにしておけば、国民は浮ばれないだけでなく、アジアの隣人からの非難を甘受せざるをえないと思うのである。

星野安三郎

アンポ講座

核ぬき自由使用とは何か

沖縄が、返ってくるか、返らぬか、核つきか
核ぬきか、のところで、焦点が作られている
権力は、つねに、言葉の目つぶしを製造する

アンポ講座

沖縄交渉で思い出されるのは十数年まえの日米（重光・ダレス）共同声明である。当時の安保交渉も沖縄にはじまり、日本は返還をことわられたうえに、安保の双務性を追及された。共同声明には、「日本が自国の防衛のための第一次責任を引受けかつ(and)国際間の平和と西太平洋における安全保障の維持に寄与しうる条件を確立するため努力すべきことが同意された」と書かれ、アメリカの新聞は「日本、海外派兵を受諾」と報道、波紋は、日本にもひろがった。政府はそこで、沖縄を断念した。

いま、沖縄は、日米安保の核心として、体制側と人民側の両側から出されている。これにくらべて六〇年安保のとき、沖縄と安保はあらゆる場で切断されていたといわれる。

だがいまのべたことで正確にいえば、政府はあのとき、沖縄に一度ちかづいて放棄したのである。現在おこなわれている返還交渉なるものも、以前と同じ過程に終るのだろうか。

そうでないだろう。かつて政府が近づき放棄した沖縄問題の本質と過程が、こんどは放棄されることなく進行しているのだ。

沖縄問題ほど多くのおとしあなをもった問題はない。返還交渉ですら一つの定型にはめられている。

日本は「核ぬき」のコンセンサスで返還を熱望し、アメリカは政治軍事的責務を要求し、首相は空手形で帰国し、マスコミは「アメリカの壁はかたかった」と書く。佐藤であろうと岸であろうと、愛知でも重光でも結末は同じである。たしかに愛知外相も佐藤首相も、この定型で旅をし空手形のカバンをかかえて帰ってくるだろう。

にもかかわらずワシントンには一定の変化がある。なぜ台湾や韓国政府が、沖縄の軍事的地位の確保について強硬な発言をしているのか。なぜ一時のように施政権分離返還の言葉が出ないのか。

なぜ日本の産業界は一時のフラストレーションをすてて七〇年代に確信をもって行動しはじめたのか。ワシントンからの確実な報道は「核つきか否かは日本の決断であり、沖縄の事前協議の適用のしかたが最大の問題」であると伝えている。不可測の要素を含みながらも、沖縄政策はもう一定の方向に動き出している。

沖縄はつねに「安保としての」沖縄としてしか存在しない。日本はアジアにおいてアメリカの代行たるべきであるという要求は、ポストベトナムとともにむしろ強まっている。それは六三年のギルパトリック発言から、「両三年」の言葉のでてきた六七年の佐藤訪米まで、一貫してみられたアメリカの政策である。そこで沖縄の政策が動き出すには、アメリカの安全保障、ドル防衛が国家的に安定されねばならない。日本にとっては、その基本路線のもとに、沖縄問題が、体制の側に都合よく進行しうるかどうか、である。

あきらかに、政府はそれに賭け、沖縄を体制側に利用しうるとみている。ポストベトナムのアジアに日本は協力する。軍事的に沖縄が使用可能なことには変りはない。核の問題がきわめてあいまいに進んでしまうことは、核空母エンタープライズの寄港で証明ずみである。むろんこのうえに愛知外相は、自動車、防衛産業問題を中心に、ドル防衛に寄与するような代償を、強く求められたのだが。

この方向に対応する日本の沖縄政策が「核ぬきの自由使用」あるいは「本土なみ」である。これはマスコミの作った言葉だが、政府は「本土なみ」を、現体制は問われぬ政権維持、即ち「安保堅持」にすりかえてしまった。しかも「本土なみ」「自由使用」は、外務省の高官があからさまにいうように「現行安保で運用できる」表現上の相違だけなのである。つまり「事前協議」でいつもイエスといいさえすればいいわけだ。経済界でも、代行者としての、自主防衛力強化、防衛予算の拡大などを自信をもって語り出している。四次防の総額は、すでに三次防の二倍になることが予想されている。三菱クライスラーの提携が防衛産業の強化を先取りした動きであるのは自明のことである。植村経団連会長は極東の平和維持のために自主防衛を漸増すべきだとのべ、三菱重工業、新明和工業などが結成する日本兵器工業会は、東南アジアへの武器輸出の実現をはかろうとする。それらの現実がとりも直さず「本土なみ」の内容なのだ。

こうして、政府によって、沖縄の争点がしつらえられている。そして一方で、政府は、十年まえ沖縄を安保の政治争点からはずしたその同じ論理そのものを展開しながら、「沖縄」を進めているのだ。それを問うことのない思想と運動は、一〇年まえの同じ壁のなかにとどまっていることになる。

（TA）

（次回は「ASPAC」実況）

脱走兵はふえている！
きっとあなたのそばにもいる。
家を労力を金を提供してほしい。それがあなたにできる具体的な反戦の意志表示だ。……ベ平連気付・JATEC（ジャテック）

アンポ化学

催涙ガス

——もはや言い逃れはできない——

最近では、デモといえば、警察機動隊がでてくる。問答無用といわんばかりに催涙弾を投げガス銃を射つ。ガス銃も水平射ちを平然とする。催涙弾と聞くと、なんだか平和的な感じがする。実態はそうではない。ベトナムで使われている毒ガスとそれは同じだ。以下に、その実態をあきらかにしようと努力をつづけている研究グループ「催涙ガス研究グループ」の報告をかかげる。（編集部）

佐世保の催涙ガスが国会でも問題となったとき、われらの政府高官は、ヌケヌケと言う。「催涙ガスであって、毒ガスではございません」そのためかどうか知らないが、毒ガスでないと思いこんでいる人が多い。しかし皮肉なことに、この催涙ガス＝クロルアセトフェノンは、米軍の毒ガス一覧表にCNという略号で立派にその位置を占めている。

毒ガスのなかには、催涙性毒ガス、ビラン性毒ガス、それに窒息性および嘔吐性のものなどがある。「人間」といっただけでは、けっして具体的な誰かをしめすことにならないのとおなじで、「毒ガス」は一般的な呼称にすぎない。

正確にいおう。クロルアセトフェノンは、催涙性毒ガスのなかのひとつである。

P型弾とS型弾

催涙液とは、警視庁発表によれば、クロルアセトフェノンを二〇倍の四塩化エチレンで溶かし、それを水で六〇倍にうすめたものという。これだけに限っても問題がふたつある。

ひとつは、有機溶剤中毒予防規則というシカツメらしい名の法規があって、それに劇毒物として指定されている薬品のうちに四塩化エチレンがあること。

もうひとつは、水でうすめたというが、水に溶けるはずがないので、けっしてうすめたことにはならない。放水の力を利用して、離れた場所にいる人間に浴びせやすくした、というのが適確である。

催涙弾には、P型（パウダー）弾とS型（スモーク）弾とがある。最近はもっぱらP型が使われている。このなかに詰められている粉末は約一〇〇グラム、黒色火薬が一グラムほど仕掛けられていて、発射後四秒で炸裂、粉末が飛びちる。

分析の結果によると、この粉末はタルクとクロルアセトフェノンとが半々である。タルクとは、夏にアセモ予防のため肌にすりこむあれだから、皮膚に付着しやすくなる。こうなると皮膚傷害をねらったとしか思えない。

新手の毒ガスか？

毒ガスとはその名のごとく、気体を空中に充満させて、「全面的または局部的に生体の機能を傷害し、敵に傷害を与える目的で戦闘などに使用させる」（化学大辞典）ものである。

だから、空気中にふくまれるガス（あるいは粉末か、まだ判然としない）の割合によって、人間に与える傷害についての記載はある。しかし、ごていねいにも皮膚にまつわりつくような工夫をこらして、人間に浴びせかけることは、毒ガスのオーソドックスな使い方でないらしくどのくらい付着するとどうなると書いてある文献は、さしあたりみつからない。

気の毒なモルモットを使ってTさんが実験した結果を簡単にのべよう。どれも、バリカンで毛を刈った上で、九平方センチの部分に塗布したものである。

① P型弾の粉末を、そのまま〇・二グラム塗る。

② 水を塗った上から、P弾の粉末を〇・二グラム塗る。

③ クロルアセトフェノンをその二〇倍の四塩化エチレンで溶かした液を2CC塗る。

④ 四塩化エチレンだけを、2CC塗る。

これらのモルモットのうち、①は体を金網などにこすりつけて落としてしまい、ほとんど〝効果〟をなくした。そのほかはいずれも一、二日後に赤く腫れあがり、ちょっと手をふれると、キーキー鳴いて暴れたが、四塩化エチレンだけ塗ったモルモットは三日位で回復した。

おそろしいことは、②と③のモルモットがほぼ治ってからもう一度塗った結果、前回より一段とひどい病状があらわれたことである。つまり免疫と逆の反応があるので、二度、三度と浴びせられた場合、傷害がエスカレートする可能性がある。すでに四月二十八日に催涙弾の粉末を浴びた人たちのうちから、今までよりひどい傷害が報告され傷害の様相も従来とは異なるタイプがあらわれだしている。

ことによると新手の毒ガスを使いはじめたのかもしれない。または右にのべたような累積効果（アレルギー反応？）が一部に現われはじめているのか。残念ながらまだ私たちには、つかめてない。

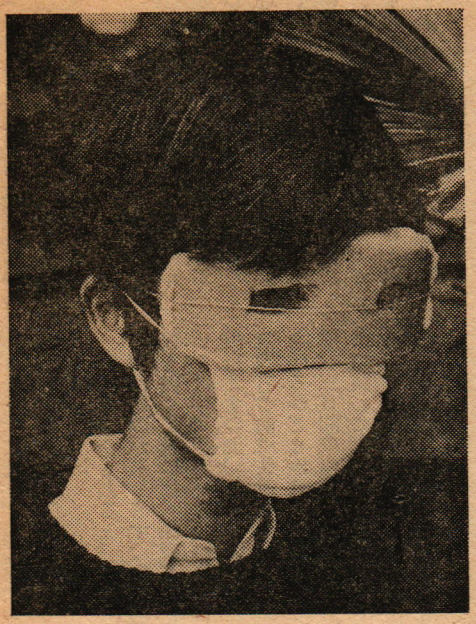
わからない治療法

皮膚のビラン・水泡そして激痛で歩けなくなった学生が続出したという現実がある。動物になにかのクスリを与えて実験するのは、人間でためすわけにはゆかないからである。すでに人間に対し使われ、その結果の被害がある以上、厳密なことはともかくとして、皮膚傷害をおこ

すかどうかを動物で実験する必要はないはずである。

ところが国会議事録によると、科学とは動物実験をすることだと思いこんでいるむきがあり、科学的に厳密でありたいとヒレキしつつウサギには害がなかったと強調している。人間に傷害がおこった記録は科学的でなく、ウサギに害がなかったのが〝科学的データ〟だということらしい。

この転倒ぶりにおどろきながら、モルモットとかウサギとかを使って、われわれの手で科学的データをそろえるべく、研究チームを編成しなくてはならなかった。しかしこのことの意義は思いがけず大きかった。



今まで軍事研究には、手を染めないことが科学者の良心であった。しかし今私たちの手には知識も情報もなく、治療法すら判然としない。権力の手に独占されている知識を私たちの手でつかみ取らなければならない。協力してくださる方、すすんで手を汚してくださる方を、私たちは求めてやまない。

（四月末ごろまでに判明したことを、とりあえずパンフレットに印刷しつつあります。タイトル「告発」　発行　集団あいすてあ（I stare or Eye stare　お好みのほうを！）定価　二〇〇円　連絡先　救援連絡センター　（五九一）一三〇一

（研究者C）

アンポ法廷

調書

——たたかいの権利を守ろう——

このごろの機動隊のデモ規制は、常識を越えたものがあります。そこで、われわれとしては、非常識な状況にであっても、驚かなくてもすむ常識をそなえておく必要があります。

完全黙秘を通すには

(1) デモに行くときは、定期券、学生証、身分証明書等自分の名前・住所がすぐわかるものは持っていかないこと。最高裁の判例では、黙秘権には氏名・住所を含まないという馬鹿げた時代ですので、完全黙秘（氏名・住所・年齢・職業・行動等の一切を黙秘すること）をつらぬき通すのには、そのくらいの心掛けが必要です。

(2) 逮捕されて後、医者にかかるのにもお金が必要です。（健康保険は、氏名等がわかるので使うわけにいきません）現金二、三千円を持っていると、応急処置を必要とするときに便利です。

(3) このごろは、現行犯として逮捕されると、下宿や、家等に捜索・押収にやってくると考えておく方が現実的です。住所録や、大切な物は他に移してからデモに出かけましょう。

弁護士を頼んで

(4) デモに行く前に、弁護士の手当てをしておくことも賢明です。このごろでは、弁護士が多忙ですので、たとえば「べ平連の指定する弁護士」とか、「救援連絡センターの指定する弁護士」とかいったいい方で、逮捕された警察に告げるほうが、手のあいている弁護士を探して送りこむのに都合が良い状況です。救援連絡センターは、反権力の闘いで捕ったすべての人に弁護士や、差入れの世話をする中心の事務所です。電話番号ぐらい覚えておきましょう。

東京都港区西新橋二の六の八浅野ビル　電話　東京（〇三）—五九一—一三〇一～二

(5) 職場につとめている人は、自分がつかまって出勤が出来なくなりそうなとき、自分のかわりに、職場に年休の申請をしてくれる人を一人探しておくことがたいせつです。年休の手続をしないと、無断欠勤が解雇の口実に使われることがあるからです。

また、地方から上京してきて東京で下宿している人は、地方の両親が呼び出しをうけることもありますので、家庭対策のために一人友人を探しておき、両親が逮捕の知らせで驚いて上京し、折角本人が完全黙秘をしていても、両親から身元がすべてわかることを警戒しなければなりません。

(6) 逮捕されてからまる二日間は警察の持ち時間です。警察では、最初に弁解録取書というのをとります。警察は、このとき「これは調書とは違うのだから、あなたの逮捕について弁解しておきたいことがあればなんでも言いなさい」などと言います。しかし、弁解録取書と供述調書は、そんなに違ったものではありません。このゴマ化しに

一歩乗ると、折角完全黙秘でいこうと思っていても、すぐがっくりきますので注意して下さい

指印は押さないこと

(7) 警察でその次にとるものが供述書です。調書というものがひとつもないのが一番良いんだということだけを肝にめいじていて下さい。万一、心ならずも喋ってしまったときでも、警察官に何度も読みきかせをやってもらい、自分に不利になると思われることはけずってもらってからしか、指印を押してはいけません。最後の指印は、証拠として法廷に出しても良いと承諾することですから、できるだけ、かりに喋ってしまった後でも、押さないことが賢明です。

(8) 警察の二日間のあとは、検察庁がまる一日です。ここでも検事の取調べがあります。この取調べは警察の取調べとは調子が変り、物柔かく、物わかりの良い体裁をとります。この洗練された取調べにころりとしてやられる人が多いので気をつけて下さい。ここでも検事調書をとりますので、指印には、とくに気をつけて下さい。

(9) 捕まってからまる三日間以内に、検事が裁判所に拘留請求をします。この三日間で拘留請求をしないで釈放となる場合もあります。これが、俗にいう「三泊四日」で釈放というケースです。

拘留請求をされると、裁判官の拘留尋問があります。完全黙秘を貫く場合には、住所不定というだけで拘留一日間の決定が出来ますので、この拘留尋問の裁判官の前で住所・氏名・年齢を喋るかどうかは重大な問題です。三日間以内に弁護士を呼んで相談して下さい。個々のケースでちがいがあるので断言は出来ませんが、道交法違反・公安条例違反の軽い罪の場合、自分が何も法律違反をしてない場合未成年の場合は、この拘留尋問の段階で氏名・住所・年齢に限って喋ると、釈放の可能性が増える場合があります。

(10) 拘留は更に十日間延長することが出来ます。逮捕されてから二、三日間拘留出来るということを知っておいて下さい。

（弁護士S）

あなた自身がアンポ運動をつくり、この週刊アンポをつくる。デモを各地にかたちづくるとともに、週刊アンポに書こう。体験、考え、行動の提案、あるいは各地のニュース……力にみちた筆で書こう。いや書くばかりでなく、編集に参加しよう。週刊アンポを売ろう。資金カンパをしよう。週刊アンポを中心にして、読者の集会を開こう。今すぐにでも——直ちに、原稿とカンパをアンポ社へ。

アンポ医学

警棒

——長いたたかいを闘いぬくために——

危険が予想されるデモに参加する場合（常に予想されるわけだが）、逆上して攻撃してくる機動隊の警棒から、まず頭を守ることが大切である。内臓破裂以外は、どうにか生命はとりとめ得るが、頭がい骨骨折で、後遺症が出ると、あとつかいものにならないから、なによりも頭にはくれぐれも注意しなければならない。以下、デモに参加するための医学上の注意を書く。

頭を徹底的に守れ

前夜は睡眠を十分にとっておくこと。十分に眠り体力をつけておかないと、息切れがし、運動の動作がにぶる。ヘルメット、手ぬぐい二本、一本は催涙液ガスから呼吸器を守るため、もう一本は出血や骨折の際に、傷口を押さえたり、しぼったりするために必要。足どしらえも大切。草履、サンダルばきはだめ。バスケットシューズよりは登山靴のほうがより安全。足の甲を盾や〝乱闘靴〟で狙ってくるから骨を砕かれるおそれがある。

ヘルメットは、アメリカ兵の浅いスチール・ヘルメットよりも、ドイツやソビエト陸軍型、つまり後方が深く下っているものが、よりのぞましい。つまり頭をやられる場合、後頭部は、小脳、延髄があるからである。耳の上、みけん、首すじもウイークポイントである。

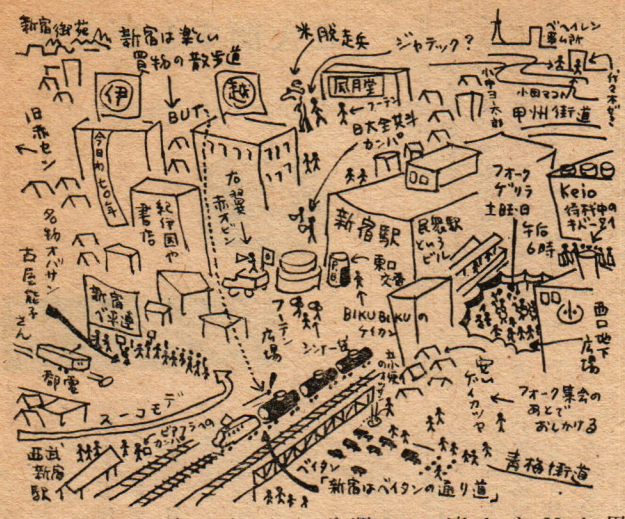
なぐられても大丈夫？　な個所はないわけだが、強いていえば、ヒップしかない。機動隊に取巻かれ乱打されたら、両手で後頭部をかかえこみ、尻をあげてうずくまるしかない。人間はこわい時にはその姿勢を自然とるようである。背骨もなぐられると、後々までたたるし、余病を引き起こしやすい。

頭をなぐられて帰宅したら、ともかく絶対安静で、水でよいから冷やしつづけ、気分が悪くてどうしようもなければ、救急車を呼ぶこと。後遺症の前兆としては、頭が痛い、目まい、吐気、根気がなくなる、眠れなくなる、思考力がなくなる……といった症状が出る。

次は外科的な傷であるが、骨折した場合、なんでもよいからその個所に副木をしたほうがいい。出血は、太い血管を切らないかぎり、手ぬぐいで押さえれば止血する。こわいのは、むしろ内出血で、頭の内出血は、今述べたように、後遺症のもとであるわけだ。あとは、腹部を強く圧迫されると、内臓破裂がおこるし、胸をやられると、肋骨が折れて肺臓にささることがある。呼吸困難におちいり、絶命することもあるから、十分注意しなければならない。

逃げる時にショウギ倒しになり、人の下敷きになったり、踏んづけられたりして、思わぬ傷を負うことがある。女性はとくに下腹部に子宮や卵巣など重要な器官をもっているから、デモ坐りこみで冷えたり、押し倒されたりすると、後になってから婦人病になる。着がえをサブザックに持っていくのもよい。腕や脚は折れても命に別条ないから、頭と腹を徹底的に守れ。

（医者M）


新宿御苑
新宿は楽しい
買物の散歩道
米脱走兵
ジャテック？
ベヘイレン
風月堂
日本全共斗
カンパ
甲州街道
小田マコ
BUT
伊
勢
旧赤セン
今日のヒロシ
紀伊国屋
書店
赤ポスト
名物オバサン
古屋能子さん
新宿駅
民衆駅
東口交番
フォーク
ゲリラ
土曜日
午后6時
Keio
待合室
西口地下広場
BIKU BIKU
ケイカン
シェー
ホホ
ホホ
ホホ

日大闘争と反大学

——たたかいのなかで学ぶ者たち——

アンポ　大学

日大闘争のバリケードのなかで「反大学」という言葉が生まれたのは、去年の一〇月だった。まだ中身のそなわっていないこの言葉は、学園闘争のひびきに共鳴してまたたくまに全国へひろがっていった。

「反大学」とは何かということになると、それはよくわかってはいない。権力そのものへの批判や、既存の学問への全体的批判をめざすという考えから、大学「解体」の思想であるものまで、さまざまである。共通していることは、過去の自主講座的なものをのり越えようとしていること、制度としてのものでないこと、大学の改良といったことでもないことである。

新しい闘争のパターンを考え出していく場として、広くいえば、大学闘争の知的側面を大衆のなかに展開する場として、「反大学」をとらえようとする考えもある。

日大生は、バリケードのなかで、はじめて自由を手にし、闘うことが生きることだと知った。しかし長い占拠の間に、学生たちは、みずからの築いたバリケードによって、逆にがんじがらめになり、バリケードにふりまわされ、そして彼らは疲労した。

反大学は、そのような状態からもう一歩新しく出発しなおすために働くことになるかもしれなかった。しかしバリケードはすべて破壊され、日大における反大学は準備の段階で潰えた。

京大における反大学

先日、私は京都へ行った。京大の数学の先生のM氏と話をした。M氏は、反大学というのは、在来の大学の「鏡像」という感じがするといった。反大学は、いくらでも下へ漏れていくようなものとして考えられないかと奇妙なことをいいだした。大学の先生が反大学の講師になるのでなく、講座も「何々学批判」といった具合でない。「教授として」という立場も失われ、講義も在来のパターンを失い、反大学では、教師も市民も労働者もいりまじっていくことが考えられないかというのである。

その後で、私は京大全共闘反大学の組織者であるT氏に会った。T氏は、京大での反大学は、階級運動としての反大学であること。行動のなかから問題を見出し、そこから討論へ、そして活字へとなるので、その逆ではないこと。結論的には、闘う部隊を創出する運動であることを力説した。たとえば、朝鮮問題の研究を続けてきた結果として、いま彼らは、九州各地の大学全共闘やベ平連などによびかけ、大村収容所粉砕のデモを行なうことを打ち出している。

中教審答申は大学の「日大」化

一人の日大生が私に語った。「ぼくは闘争が始まるまで、学校がおしつける毎日の講義に何の魅力も感じなかった。しかし闘争が始まってからは、ぼくには勉強したいこと、知りたいことがたくさんでてきました。そして毎日勉強しなければならなかった」と。

いま私は、学びたい者が、学びたいことについて、自由に学べるところとしての、そのような基本的な、自然な欲求が大衆参加の形で満たされるものとしての「反大学＝混沌大学」を夢想したいのである。これに対して「正大学＝秩序大学」のほうはどうか。

中教審答申は、研究、教育の機能と、管理の機能の分化をふくみ、たとえば複数の副学長制をしいて、管理中枢機関の指導性の強化を主張している。

日大会頭の古田重二良氏は、一九五八年にすでに、大学院大学や高等工専の構想を打ち出したが、氏は三人学長制や、常務理事制のもとで、管理機構の強化、近代化を実現していたのである。

したがって、学生たちが、あらゆるところに「日大闘争」をというのに対して、中教審は、あらゆる大学を「日本大学」にと主張しているのだ。

六月二日、日大文理学部の授業が再開された。授業を妨害しない等の確約書とひきかえに、写真添付の聴講許可証を手にした学生は、体育系学生などの数十名の警備員の人垣のなかを一人ずつ通って構内に入った。三年生はここで三週間の講義をきいて、四年生になるという。講義を討論集会にきりかえようとした学科へは右翼学生の襲撃があったという。一時は古田理事会批判を決議した諸学部の教授会もみずからのなした確約を破古にして、テンとして恥じないのである。

逮捕者一〇一二名（うち、起訴されたもの、七四名）、負傷者七〇二〇名、うち重傷者約七二〇名（失明三、半身不随六）、これが一年間に日大生に加えられた弾圧による数字である（日大闘争救援会—東京都新宿郵便局私書箱六四二号調べ）

二十数億円の使途不明金、土地買収問題、学生弾圧…などの疑惑と汚辱にみちた古田理事会を支えてきた機動隊が、あさましくも、恥しらずに加えた暴力の生んだ数字なのである。

（福富節男）

近況報告

イイコトハマスマスヨク
ワルイコトハマスマスワルイ
アンポノマエノ年ノ六月

片桐ユズル

愛知外相の訪米

――カバンの中味を推理する――

アンポ　沖縄

愛知外相は五月三一日、羽田をたった。行き先は米国。目的はもちろん沖縄返還の本格的交渉である。沖縄の返還はほんとうに実現するのか、交渉はほんとうにスタートするのか、国民はそのへんのところには大きな疑問を抱いている。しかし、返還はたしかであろう。米国側の壁がいかに厚かろうと、米国の極東戦略と日米安保条約の性格上、沖縄は日本に返還したほうが、日米両政府にとって得策だからである。愛知外相は返還のための具体的とりきめをまとめるため、訪米したのである。外相のカバンには、いろいろなとりきめがいっぱいつまっているにちがいない。けれどもカバンの中味は何がはいっているのか、国民は何も知らされていない。

そこで、ここではどういうとりきめが日米両政府の間で、かわされたのか、そのことをご紹介しようと思う。その前に沖縄返還の日米両政府のやりとりを簡単にみてみよう。

ベトナム戦争敗北と沖縄返還

沖縄返還の構想に手をつけたのは米国のほうがさきであった。この構想は米国極東戦略体制再編成の一環だったことをまず頭にいれておいていただきたい。佐藤首相は、この構想を日本国民むけに忠実に実現してきたのである。

第一に、日本国民の核アレルギーの解消策が考えられた。原潜、核積載空母の佐世保・横須賀への寄港がそれである。

第二に、「日本はアメリカの傘の下にある」という共同声明が発せられ、日米共同責任が確認された(四〇年一月)。

このことは日米安保条約の核安保への変質を意味している。やがて、ベトナム戦争深化と米国の敗北のもとで、米国首脳は安保体制強化と沖縄返還とをからませて、プログラムを示してきた。だが、沖縄返還をただちにスケージュールにはのせなかった。日本国民の反戦・平和の運動を恐れたからである。だからといって、返還を棚上げしては、日米両政府は元も子もなくしてしまう。ベトナムでの敗北が決定的になると、米国は電子計算機を使って返還の得失をはじきだした。結果はGO!である。

日本政府は、こうして返還問題をまじめに考えねばならない破目にたたされたのである。やりとりは急がれた。ついに、米国極東政策の一環としての沖縄の重要性を認めあったうえで、返還が具体化されたのである。

しかし、だいじなことはアメリカ側と日本側のあいだで、たいてい、きまっているのだ。以下に書きぬこう。

A　沖縄返還について　すでにきめられていること

(1)軍隊や核をふくむあらゆる種類の兵器の自由なもちこみ

(2)あらゆる種類の兵器、補給品の自由かつ無制限な貯蔵

(3)兵力、航空機、船舶輸送の自由

(4)戦争ぼっ発の際、沖縄県民の米軍への協力

(5)軍事基地を守るための治安上の措置

(6)日米安保条約の沖縄への適用

では、きまってないことは何か

B　返還についての懸案事項

(1)沖縄の債務・債券・ドルの処理

(2)米軍基地の治安のため、基地の整理統合をどうするか。

(3)経済開発・社会保証をどうするか。

つまり、きまっていないことはわずかで、愛知外相はそれだけのことで、「交渉」などとほざきたてているのだ。とすると愛知外相は、いったい何のためにアメリカまで出かけたことになるのか。

（葵　攻一）

《小中陽太郎のロンドン便り》

ジョン・レノン、小野洋子の二人は、明日バハマ諸島へ行くところです。ニクソンにベトナム反戦のためのドングリをやる予定が（ドングリが樫の大木になるまで世界の平和を守れという意味）、アメリカがヴィザを出さないので、キューバのそばのバハマ諸島へ行ってベッドイン（ベッドのなかの記者会見）をやるそうです。ベ平連の脱走兵のビラと提案をたくさん渡しました。バハマでくばってくれるそうです。さしずめこれは、ビートルズ・ベ平連。あとで書きますが、アメリカ・インディアン・ベ平連もできます。

レノンと洋子さんは、六月一日までにバハマから週刊アンポ向けに原稿を送ってくれます。このテスト版に間にあうといいですね。間に合わなくても、この試みをなんとかしてください。レノンは六・一五のデモにメッセージをよこしました。こういう文章です。

〈ピース・アンド・ラブがんばれ六・一五〉

また九月に来日して、アンポ全国キャラバンに出てくれます。

〈9月アンポ全国キャラバン〉

9月下旬から1カ月，週刊アンポ発行を記念して，北海道から沖縄まで，キャラバンは行き，各地にデモと集会をかたちづくる。現在までの参加予定者は**イギリスからは，ジョン・レノン(ビートルズ)＋小野洋子。アメリカからは，ノーム・チョムスキー，フランツ・シャーマン。キューバからは，誰か。日本からは，このお知らせの文章をよむあなた。**

ハンパクをつくろう

「反戦のための万国博」――略してハンパク。万博に対する反博。アンポの年の七〇年に、それを妨害するような形で「人類の進歩と調和」という厚化粧をほどこして待機している万博を、われわれは黙ってみすごすわけにはゆかない。

なによりも二兆円という金をつぎこむこのバカげた（だけでなく敵対的な）お祭りが、主権者であるわれわれ、地元の市民にも何の相談もなくきめられたことに腹を立てた。

よろしい。相手がそうならこっちにも考えがある。

準備は着々進んでいる。場所は三〇万人収容可能の大阪城公園。期日は今年の八月七日から一一日まで。この公園は例の鉄筋で作られたスモッグにかすむ大阪城の真下。ゴジラとガメラ決闘の古戦場。敗戦の一日前の八月一四日、大空襲で壊滅した東洋一の大兵器工場・砲兵工廠のあったところだ。そこで「人類の平和と解放のためのANPO70」は開かれる。

さて中味は何か。「ハンパク市民大学」がある。そこで科学と戦争について考える。サイエンスだけではない。構造主義から現代の政治・社会状況、文学までが講座にはいっている。

反戦映画が上映される。さまざまな展示もある。催涙弾のヌケガラがあり、それがどんな薬品をふくんでいて、ベトナムで使われる毒ガスとどんな近い関係にあるかが示される。さらに音楽があり、辻説法があり、演劇があり、討論会がある。青空状況劇場「目玉座」は「ハンパク座」として新たなスタートを決意している。パネルは誰がたててもよい。一枚が二千円。たてる人が払う。反博にはホステスまでいる。ただ世の凡百のホステスと違うところは、彼女自身が参加料（一日三〇〇円也）を払うことだ。

喫茶店、食堂もある。「米帝コーラ」も飲めるし、よそでは食えぬ献立もあるすなわち、大村収容所定食、ブタ箱定食東京拘置所定食など。

さて、安保に反対の大阪中の市民が、いや全国、全世界の市民が、八月、大阪城公園に集まったら、それは「人間の解放」をめざす画期的なお祭りとなって、いま楽屋に待機しているニセモノ万博をして顔色なからしめるに違いない。

すでにおもだったところでは、「キューバ文化省」「南ベトナム解放民族戦線」などをはじめとして、世界五〇団体がハンパクに参加を決定している。

この文章を読んだあなたも、いまからでも遅くない。大いに参加しよう。出品してもいい、手伝い人足になってもいい。いや、何より最終日に行なわれる大デモに参加しよう。

出品お申しこみ、連絡先は大阪市北区万才町三四―四　寿ビル三〇四号室　**ハンパク協会**にどうぞ。TEL　06（312）4887

（ハンパク協会）

おれもやる．きみもやる

フォークを歌おう

巨大なビルが立ちならぶ副都心・新宿・鉄とコンクリートのかたまりは私たちを無言のうちに拒絶する。いっさいの人間的ないとなみが、高度に組織化された管理社会に冷たく組込まれている現在、人間の復権はいかにして可能なのか。

新宿西口地下広場。固いアスファルトと人工的な柱が形造る広場。あらゆる甘美な商品がならび、無関係なひとびとが急ぎ足で行きかう広場――。だがそれはほんとうの広場ではない。

私たちがここをプロテスト・ソングの場に選んだのは、この非人間的な空間を私たちの、人間の広場にするためだった。

ギターを弾く。歌が流れる。ひとびとが集まってくる。それは合唱になった。日常に不満を抱き、いつわりの平和にいかりを抱く若者は二月から回を追うごとにふえていった。討論の輪が広がっていった。あらゆることが語られた。微温的な日常性からの飛翔への願い――それは人間の叫びそのものであった。五月一七日、機動隊が現われ、私たちをけちらした。彼らはいったい何におびえたのか。

五月一日。「いっさいのカンパ、討論、合唱」の禁止令が出たとき、われわれはそこに「表現の自由」の弾圧の意図と同時に、権力者の「おびえ」をすら感じとったのだ。私たちは人間としての誇りをもってそれに抗議した。禁止令の出た西口へギターを持込み、いっそう強くプロテスト・ソングを歌った。

突進してきた機動隊。足腰をけられ、指をネンザし、ギターを破壊された。排除されたあとの抗議集会にもかれらは現われ、私たちをけちらした。翌週、私たちは弾圧に対して、ふたたび歌をうたうことで抗議した。その日は三〇〇〇人をこえるひとびとが集まった。次の週にはそれに倍する大きな輪ができた。これが私たちと、私たちを支持する若者が出した回答にほかならなかった。

機動隊がはじめ、私たちを強制排除し、次に混乱をおそれて手びかえたこと、それは、私たちの行動が、確実に権力者に圧力をかけたことを意味する。だが、それに自己満足することにとどまってはいけないのだ。たとえば、私たちの広場はわずか土曜日の三時間であるにすぎない。それ以外はやはり、非人間的な空間であり、抑圧の場でもあるのだから。とすれば、私たちはどうしたらよいのか。

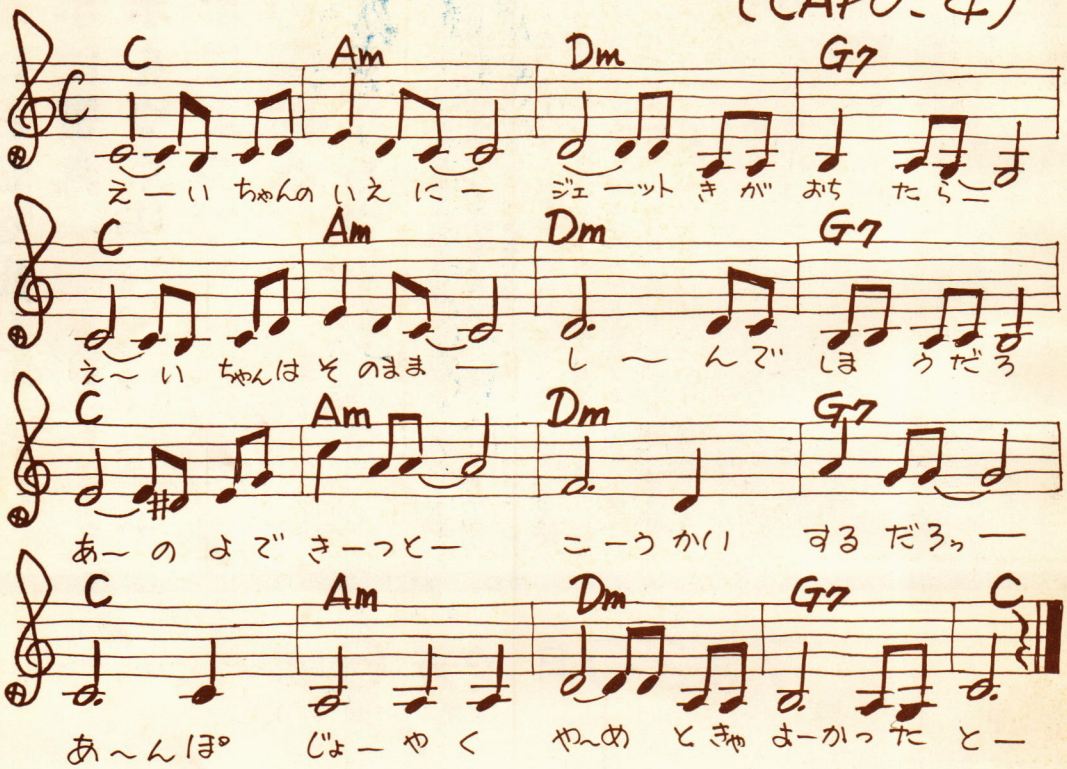
答えは簡単だ。土曜の三時間を毎日の二四時間にすること。そして西口広場を東京のいたるところに、全国のいたるところに作り出すこと、これである。「人間の解放」をめざした私たちの闘いは、けっして終ることはない。私たちを圧殺し、私たちを抑圧する〝秩序〟が存在するかぎり、私たちのギターの弦は切れることはないし、私たちの声はけっしてその叫びをやめることはないのだ。来たまえ、土曜日六時、新宿西口広場へ。

（東京フォーク・ゲリラ）

栄ちゃんのバラード

作詞
作曲 } 南大阪ベ平連（なんだいべ）

（CAPO：4）



1. 栄ちゃんの家に ジェット機が 落ちたら
栄ちゃんは そのまま 死んで しまうだろ
あの世で きっと 後悔するだろ
安保条約 やめときゃ よかったと

2. ニクソンの家に 泥棒が はいったら
泥棒は きっと 居直る だろう
お前も ベトナムで 強盗してるだろ
お前も おれも 同罪さ

3. あなたの家に ファントムが 落ちたら
だれに 文句を 言えば いいのか
アメリカ軍か 日本の政府か
どちらも あてには ならないよ

いらすと：えんどーよ.

週刊アンポにお金を出し
週刊アンポに書き
週刊アンポをつくり
週刊アンポによって
安保粉砕の運動を
それぞれにかたちづくる人々

長坂富士男清水宏幸秋田明大埴谷雄高安井順郎野間宏岩本重雄小田実佐久間勝彦開高健岩永正敏木下順二山本義隆西川光治柴田翔松田正眼貝原秀樹大熊直人笠原芳光古屋能子奈良本辰也阿部裕梅本克己伊津信之介小田切秀雄五味正彦高橋和巳井上澄夫なだいなだ井上豊子多田道太郎前川美智代竹内好井沢幸治中野重治奥野卓司中野好夫山本健治戸村一作高橋実利光孝憲和田長久斉藤雅子塩崎等一原田奈翁雄是永慶治針生一郎石村勝美いいだもも武内俊造吉川勇一倉田令二朗もののべながおき松本昭文桜木徹郎永六輔浜田亮典水口義朗白川充井出孫六弓削忠利吉田玲子森純夫安東仁兵衛山之内正彦沖浦和光山下孝志板谷翠鶴見良行粟津潔阿部知二武藤一羊生和さち子作田啓一青池憲治小中陽太郎浅野虎彦黒木和男杉山竜丸深作光貞高石友也栗原幸夫高橋武智久保圭之介土本典昭寺井美奈子国府田恭子日高六郎古山洋三清水幸子安東次男小林トミ久野収安藤紀男松田道雄石川博光平山照次岩松繁敏石田郁夫片桐ユズル井上清前田俊彦山下道也真継伸彦上野博正北小路敏遠藤洋一鶴見俊輔北添忠雄大沢真一郎小松左京大塚正立中川五郎北沢恒彦福田善之黒川真一佐久間稔羽仁五郎原卓也山口文憲室謙二杉浦明平佐野彰治野田祐次吉岡忍金井和子堀田卓吉野源三郎佃実夫田守順子宮岡政雄鈴木修三阿奈井文彦加藤啓八木みどり三島恭子山田宗睦山本健二向井孝古川泰龍竹淵愛鈴木達夫花崎皋平佐野健治斉藤征夫柴谷全啓塩沢由典橋本峰雄野坂昭如岡林信康鈴木正穂木村汀子中尾ハジメ富田正勝穴山行子羽田素子大江健三郎小黒弘金井佳子佐藤信福島菊次郎吉岡攻栗原達男鶴見和子藤枝澪子福富節男児玉直樫山文枝橋本治志茂美栄子池田浩士久能昭数馬桂子山田憲太郎佐々木マキ梶原寿内村公義今井誠無着成恭天野道映竹内静子Kしふみ大川庄一　そして今これを読む**あなた**（六月三日現在確認）

7月20日　夕方6時
（札幌のみPM. 1：30）

それはジュネーヴ協定の日だ。
そして新しい安保粉砕の運動が始まる日。
週刊アンポの読者よ、集会とデモのために、
以下の地に集まろう！
それが新しい運動の出発をかたちづくる。

札幌＝＝テレビ塔下
東京＝＝新宿駅東口
京都＝＝市役所前
大阪＝＝梅田地下街
福岡＝＝市役所前

週刊アンポ
0号第2版　編集・発行人　小田実
発行所　㈲アンポ社　東京都渋谷区神宮前3－31－18
電話03－402－0416，5160　振替東京4286